

## 【論文】

# 渡部政盛の教育学におけるニーチェ受容とその特質

松原 岳行

## はじめに

本稿の目的は、渡部政盛（1889-1947）がニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）の思想をどのように受容したのかを明らかにし、その特質を検討することである。

渡部政盛という人物に注目するのは、彼が1918年という日本の教育学においては比較的早い時期に自著『最近教育学説の叙述及批判』<sup>註1</sup>の中で「ニイチェの教育説」と題するニーチェ論を披露しているからである。現時点で判明している限り、タイトルにニーチェの名を冠した教育学者によるニーチェ論の先駆は小西重直（1875-1948）の1917年論文「ニイツェの学制論」であり、渡部政盛の「ニイチェの教育説」はそれに次ぐ例となるが、初期ニーチェの講演論文「われわれの教養施設の将来について」に特化してニーチェの教育学的意義を局所的に論じた小西とは違って、渡部はニーチェ思想の全体を射程に収めつつその教育学的意義を論じた点できわめて興味深い。

ところが、渡部の「ニイチェの教育説」は従来ほとんど無視されてきた。その主な要因は、そもそも渡部政盛が知られていないという点に求められる。渡部のニーチェ受容が看過されてきただけでなく、渡部政盛の教育学それ自体が研究対象とならなかったのである。先行研究と言えるのは、管見の限り、息子である渡部晶の講演録「大正新教育と渡部政盛の教育思想」（1987）と鈴木明哲の論文「戦時下における腹と腰—渡部政盛の体育論から—」（2013）のみであるから、その注目度の低さは相当である。

その要因の一つは、後述するように、渡部政盛がいわゆる講壇教育学者としてのキャリアを歩まなかったからである。ただ、渡部は在野の教育学者として精力的に執筆活動を行い、『最近教育学説の叙述及批判』（1918）、『日本教育学説の研究』（1920）、『現今改造的教育思潮批判』（1921）、『教育学術問題批判』（1923）、『教育学説の論理及び其批判』（1924）、『現代日本の教育学説及其批判』（1927）、『現代教育学の形態と其動向』（1933）、『日本現代の教育学』（1937）など、近代日本の教育学全体を俯瞰的に捉えるような多くの著作を発表した。「現在この渡部政盛というのは知られておりませんが、実は大正新教育の時代には随分知られていた人間でした」（渡部晶、79頁）と渡部晶も述べるように、渡部政盛は「教育評論家」（前掲書、80

頁)として、近代日本の教育学形成期において一定の役割を果たしたのである。

以上のような問題関心から、本稿ではまず渡部政盛のプロフィールを把握したうえで、同時代の教育学と渡部の関係性を確認し、1918年の著作『最近教育学説の叙述及批判』に収録されたニーチェ論「ニイチエの教育説」の内容を検討する。次に、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験参考書『文検西洋東洋日本教育史』(1918)および守屋貫秀との共著『最新教育辞典』(1930)におけるニーチェ受容について考察し、非教育学的なニーチェ思想の教育学的意義をどう考えたのかという観点から、その後の渡部によるニーチェ受容の具体的な内実を明らかにする。以上を踏まえ、最後に、近代日本の教育学形成期を生きた在野の教育学者、渡部政盛におけるニーチェ受容の特質や意味を検討する。

## 1. 渡部政盛と同時代の教育学

### (1) 渡部政盛のプロフィール

渡部自身も編者として参画した大日本学術協会編の1928年著作『日本現代教育学大系・第2巻』<sup>註2</sup>所収の「渡部政盛氏教育学」(301-400頁)によれば、渡部政盛は山形県出身であり、吉田熊次(1874-1964)や小西重直、田制佐重(1886-1954)など、同時代に活躍した教育学者と同郷ということになる。しかし、渡部は彼らとは違い、一風変わったキャリアを持つ。

「氏【引用者註：渡部政盛】は明治二十二年の生れであれば、本年(昭和二年)は三十九歳になる。併しながら日本現代の教育学者としては、最も年少の部類に属する訳である。氏の学歴は全部独学である。郷里の小学校を卒業した外、これぞと云ふ学校教育は受けてゐない。尤も氏の自伝に記すところに由れば、神田の英語の夜学校に一年半通ひ、角帽を被つて見たくて日本大学にも通つたことがあるとのことである。併しそれも不熱心な教授や講師の講義ぶりに愛憎をつかして、たつた一年半程で御免を蒙つたと云ふのである。要するに氏は純粹の独学者である。」(大日本学術協会 1928、301-302頁)

吉田熊次と小西重直は東京帝国大学卒業、田制佐重は早稲田大学卒業という華々しい学校歴を保持しているのに対し、渡部は英語の夜学校も日本大学もそれぞれ一年半で中途退学しており、厳密に言えば、最終学校歴は高等小学校卒業である。ただ、渡部自身もこだわるように、学校歴と学歴とは必ずしも同一ではなく、まさに文字通り独学で学歴を積んだことを渡部は自負している<sup>註3</sup>。

息子の渡部晶はこう述べる。「渡部は、若い時には小学校の先生になろうと思ひ、それで山形師範学校を受けましたが不合格であった。畑で働いていて稲のハッパかなんかで目を切つてしまひまして、師範学校には入れませんでした。したがって検定試験でずっときまして、そし

て東京で小学校の先生をやりました。」(渡部晶、80頁)——この証言が正しいとするならば、渡部の学校歴が小学校卒業でストップしている理由は、あくまでも眼球負傷による視力の問題であって、学力の問題ではなかったと言えよう<sup>註4</sup>。

では、職歴はどうか。『日本現代教育学大系・第2巻』の説明によれば、渡部の職歴はおおよそ以下のとおりである。「渡部氏は曾て小学校に教員を奉職した以外、今日まで一度も官途についたことはない。この点に於て氏はまた純粹に野学者である。氏の出世経路は小学校教員を止めて教育雑誌(教育界)記者となり<sup>註5</sup>、それから最後に現在の著述家となつたところにある。」(大日本学術協会 1928、302頁)

渡部晶も言うように、渡部政盛が最初に就いた職業は小学校の教員であったが、じつは渡部の子どもの頃の夢は「筆の人」、すなわち著述家になることであった(渡部 1937b、210頁)。しかも、最初は文学に、青年期には哲学や宗教に興味を抱いており、もともと「教育」には関心がなかったという。しかし、いくつかの要因が重なって「教育や教育学へ精神生活が変転し」(前掲書、211頁)、結果として教育の著述家になることとなった。

その一つ目の要因が、小学校教員になったことである。渡部によれば、当初は「言はゞ腰掛的に方便的に教員となつた」(同上)のだが、「いつの間にか教育に興味を有し、児童生徒が可愛くなり、その教育的生活の体験を反省するようになるや、二三教育学書を繙いたのが機会をなして、教育の理論研究に関心をいただくようになった」(同上)という。

二つ目の要因は、小西重直の著作『学校教育』との出会いである。渡部によれば、「小西先生の「学校教育」は、説くところは自学輔導主義であり、運動感覺主義であり、勤労主義的であつたのみならず、その文章には熱があり誠が込もつて、氏の全人格が紙面に浮び出てをるような気がし、私をして感激を催さしめた」(前掲書、212頁)。渡部は小西の影響を多分に受け、教育の理論研究に興味を抱くようになったのである。

そして三つ目は、先述したように、小西も含め、「郷里(旧米沢藩)から当時多くの教育学者が輩出し、日本の教育学界を動かしてゐたこと」(同上)である。渡部の言葉を借りるなら、「それら大先輩に刺激せられて、「自分も一つ」と云ふ気が動いたこと」(同上)が、渡部を教育学へと向かわしめた決定的要因だったのである。

## (2) 同時代の教育学と渡部の関係性

では、渡部政盛は同時代の教育学ないし教育学者らとどう関わったのだろうか。33歳の渡部が書いた自伝『異端者の悲しみと歓び』(1922)の巻末には、「著者より」と題された次のようなメッセージがある。

先生の御経歴はなどともう聴かないで下さい。講習や講演に参つても、私を経歴いちめにしないで下さい。私には何等の学校歴も官歴もありません。お辱しいことながら私は単に小学校を卒業しただけの者です。そして社会から始終異端者の取扱ひを受けて来た以外、何等の社会的栄光をも有たない者です。異端者！異端者！これが私の総ての方面を、最も遺憾なく表徴するところの語です。随つて時には淋しく悲しいこともあるが、そのかはり底知れぬ独自の歎びを感じずることもあります。お蔭でこの頃は博士・教授・何々官・さう云つた金ピカな文字に、眼を煩はされずにどうやら済むやうになりました。(渡部 1922a, 432頁)

引用部からも明らかなように、渡部の心根にあるのは、端的に言つて経歴コンプレックスである。自らを「異端者」と呼ぶほどその根は深い。しかし渡部は、学校歴や職歴に対するコンプレックスを著述業という仕事によって克服する。講壇教育学者が獲得できないような広い視野をもって日本の教育学全体を俯瞰し、異端者の強みを生かして、博士や教授が講ずる教育学を批評していったのである。

1937年の著作『日本現代の教育学』の序文冒頭で渡部はこう述べる。「日本の教育学界は、よく言へばオーケストラの如きものであるが、わるく言へば子供の「おもちゃ箱」をひつくりかへしたような観がある。それ程雑然混然として帰一する所がない。」(渡部 1937d, 序1頁)——教育の理論研究を志した渡部の仕事は、特定の学閥に属することでも自らの教育学を構築することでもなく、雑然混然とした日本の教育学を第三者的な視点で捉えることであり、したがってまたその作業は自然と批判的な性格を帯びることとなった。「クリチックは非常にむづかしい。であるから私は相当慎重にこれを試みた積りである。だが茲に私の慎重と言つたのは言ひたいことまでも遠慮して言はないと云ふようなことではない。かゝる点にかけては、私は一箇自由の野学者的存在であつて、他に対し何等のかゝりも有しないが故に、無遠慮と評せらるゝ程自由に痛烈にこれを批判した。この点は寛恕を願はねばならない。」(前掲書、序2頁)

いかなる学閥にも属さず自由な立場で遠慮なく批判を加えるというのが、渡部の流儀であつた。大日本学術協会編『日本現代教育学大系・第2巻』によれば、渡部の文章は次のように評することができるという。「渡部氏の著書の特色は、記述がきわめて平易であり、批判的であり、而もその結論が穩健妥当である点にある。氏の批評は鋭い、時には鋭さがあまつて毒筆に近いものすらある。左顧右眄するところなく自由に快筆を振ふ。それだけまた敵も少くないやうである。」(大日本学術協会 1928, 305頁)——文章はわかりやすく結論も穩健妥当であるが、その筆致は毒筆と言えるほど批判的だったために、渡部には敵対者も多かったというのである<sup>註6</sup>。

1926年、渡部は「ひとりごと」と題する一文を『帝国教育』第522号に寄稿した。編集担当者が掲載するかどうかを躊躇<sup>註7</sup>したこの原稿の中で渡部は、当時の教育記者を相手に「文章が

著しく下手になつた気味がある」とか「記者的見識に於て欠くところがある」などと批判したうえで（渡部 1926a、93頁）、次のように述べる。

序だから一言しておくが、記者のいゝ加減な知つたか振りや幫間行為は、大きくは教育社会を誤り、小さくは御当人の品性や人格を損ふことが甚だ大であるから、自重して貰ひたいことである。私は最近二三回かう云ふ経験にぶつつからしめられた。その一は、〇〇の□□□□だが、いつぞや私の写真を掲げて、そして説明(?)解説(?)評論(?)して曰ふには、『渡部は文検者のために集成物を書き金を利けた』と。故に彼の新居は『集成堂と名づけるが宜い』とか。ザッと左様なことを書いてあつた。これなどは本気で書いたものとは勿論思はないが、実に滑稽のきわみである。何となれば私は「集成物」は著したことがないからである。また文検者のために二三書いたものもあるが、しかしその他の私の著書は、何も文検を標榜しては書いてをらんのである。尤も私の本が文検者に喜んで繙かれると云ふのならば、それは当然ぬことではない。併しさうなると私の本ばかりでなく、大瀬の本でも乙竹の本でも吉田の本でも、皆さう云ふことにならなければならぬ。何となれば大瀬の心理学や乙竹の新教授法や吉田の系統的教育学などは、これを買つて読むものは、その殆ど総てが文検者だからである。とにかく私なり私の著作なりを真に知るものから言はしむれば、□□□□の記事は、『記者と云ふものは随分いゝ加減なことを書くものすな』と云ふ感じをもたしむることや必せりである。これなどは記者の無知な知つたか振りを勇敢に暴露したその一例である。(前掲書、94頁)

一部伏せ字になっているため渡部の敵対者が具体的に誰なのかはわからないが、渡部が「文検者のために集成物を書き金を利けた」ことを揶揄する記事が出回ったこと、またそのような批判の記事に対して渡部が反批判を行っていることは明らかであろう。文検者とは、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験受験者のことを指している。つまり渡部は周囲から、教育学者の名に値しない受験参考書の執筆者として馬鹿にされているのである。

それに対して渡部は、文検受験者のために数冊の本を書いたことはあるものの、誰かが書いたものをただ寄せ集めただけの集成物を出版したことは一度もないと反論する。そして、大瀬甚太郎(1866-1944)、乙竹岩造(1875-1953)、吉田熊次(1874-1964)ら、自分よりもはるかに年上の教育学者を呼び捨てで名指しながら、自分も彼らと同様、結果として自らの著作が文検受験者に選ばれているのだと主張する。

小西重直をはじめとする教育学者らの影響を受け、「自分も一つ」(渡部 1937b、212頁)と教育学界に参入しようとした渡部であったが、自身の性格<sup>註8</sup>や経歴などさまざまな要因により、教育学者とは常に一線を画す関係にあった<sup>註9</sup>。同時代の教育学と渡部とのこの微妙な関係

性をどう捉えればよいのだろうか。果たして渡部教育学はどう特徴づけられるべきか。そもそも渡部政盛を教育学者と呼ぶことは可能なのだろうか。

### (3) 渡部政盛の教育学

1920年の著作『日本教育学説の研究』の中で渡部は次のように述べている。「本書の著者たる余は、固より教育学者では無い。又所謂教育学者たらんことを欲するものでも無い。併しながら余固と教育及び教育学の批評乃至研究に興味を有し、絶えずそれらに注意することここに歳がある。而も著者は何等学問の背景を有するでも無ければ、又口を箝せねばならぬ先輩をも有たない。随て全くそれらの点に於いては自由の地位にある。これ余が此の最好地位を善用して、本書の標題の示すが如き批判研究を試みやうとしたのである。」(渡部 1920、34頁)——このコメントを字義通りに解釈するなら、渡部は自分自身を「教育学者」ではなく、教育や教育学について自由に批評や研究を行う「教育評論家」だと認識していたことになる。

では、周囲は渡部をどう見ていたのか。『日本現代教育学大系・第2巻』は渡部のことを「教育評論界の第一人者」(大日本学術協会 1928、301頁)と紹介しているし、同書には次のような記載もある。「小西重直博士が、曾て倉敷の全国初等教育研究大会の席上に於て、氏を評して下の如く言つたことがある。「渡部氏は教育評論の天才であり、教育学の組織者であることは世間周知の事実であるが、而も氏は他に自学主義の大なる体験者である」と。自学主義とは氏の独学を指せるものである。この小西博士の評言こそ、渡部氏の本領を十分に証して余りあるものである。」(前掲書、303頁)——学校歴を持たない渡部の独学を賞讃する文脈ではあるが、小西重直が渡部を「教育評論の天才」と評していることは明らかであろう。渡部は自他共に認める教育評論家だったのである。

しかし、それは「教育学者>教育評論家」という格差ではなく、むしろ「内と外」の違いであると捉えるべきであろう。どの学閥にも属さないがゆえに異端者扱いを受けることも少なくなかったが、その反面、渡部は常に自由の身であり、当時の教育学を俯瞰できる立ち位置にいた<sup>註10</sup>。教育学の内部【大学や学閥】に属さないという意味において渡部はいわゆる教育学者【講壇】ではなかったが、教育学の外部から一教育学者【独学】として同時代の教育学に関わろうとしていたのかもしれない<sup>註11</sup>。小西が渡部を「教育学の組織者」(同上)とも呼んでいるのは、おそらくそういう意味であろう。渡部は単なる教育評論家ではなく、「思想的な教育学者」ないし「批評家的な教育学者」だったのである(前掲書、306頁)。

では、渡部自身の構想する教育学<sup>註12</sup>はどういうものだったのである。『日本現代教育学大系・第2巻』によれば、渡部教育学を構成する要素は「被教育者観(児童観)」と「価値観文化観等」

であり、「この両者を基調として、その本質の契合するところに教育乃至陶冶が成立すると見ると」点に最大の特徴があるという（前掲書、307頁）。「要するに渡部氏の言ふ教育とは、被教育者の学習活動即ち経験構成を、かくの如き体験価値の方向へ示唆し誘導し助成することである。個人味を失はずして而も普遍妥当的な、現実的にして而も内在理想的な文化生活、その方向へ被教育者を誘導することである。」（前掲書、336頁）

このように、渡部独自の教育学として語られる内容はきわめて標準的であり、まさに「穏健妥当」である。個性を重視しながら普遍性も担保し、現実根ざしながら理想も追求する——よく言えば、非常にバランスのとれた教育学の構想であるが、その一方で、独自性や特徴に欠ける面は否定できない。「渡部政盛氏の教育学論中には、他の如何なる教育学にも見られない、一種独得のものがある。それは教育学の組織に関する新しい考である。新しい考とは、（一）学習本位の建設、（二）あらゆる価値を以てその内容とせんとする考、（三）自学主義的方法の構案、（四）学習訓練の挿入、（五）体験主義の導入である。」（前掲書、339頁）——『日本現代教育学大系・第2巻』は渡部教育学のオリジナリティをこう指摘しているが、ここに列举された5つの点は、渡部自身の来歴との親和性を除けば、さほど特筆すべきことではない。

以上を踏まえれば、小西重直や吉田熊次らと同レベルの教育学を渡部が構築したとは言いがたい。しかし、だからこそ渡部は当時の教育学の全体像をまんべんなく把握でき、また文検者用の参考書も執筆できたのではないか。私たちは渡部政盛の著作論文のうちに、いわば当時の日本における標準的教育学を見ることができるのである。果たして教育学者としての渡部政盛はニーチェ思想を教育学的にどう評価したのだろうか。

## 2. 1918年著作『最近教育学説の叙述及批判』収録「ニイチェの教育説」

最初に注目したいのは、1918年の著作『最近教育学説の叙述及批判』である<sup>註13</sup>。なぜなら、「はじめに」でも述べたとおり、この著作の第4章「個人的教育学の思潮及批判」には「ニイチェの教育説」という先駆的ニーチェ論が収録されているからである。渡部が私淑した小西重直の1917年論文「ニイツェの学制論」は、ニーチェの初期著作「われわれの教養施設の将来について」に焦点化してニーチェの教育観を明らかにする試みであったが、果たして渡部はニーチェをどう評価したのだろうか。

### （1）肯定的評価—自己修養の目標としての「超人」—

所謂超人主義の教育を主張したものは、有名な独逸の詩人的哲学者、フリードリッヒ・ニイチェである。勿

論ニイチエはこれを纏まつた教育説として世に公にしたのではない。其の文学的作物、即ち「ツアラストラ」、及び瑞西パーゼル大学教授時代の講演、「我が教育制度の将来」等の中から、吾々が其の思想を拾つて然く云ふのである。而もこれらの作物は広く各国の人々に読まれ、思想界に深く影響を及ぼしたことは言ふまでもない。彼のグルリットの教育説、エレン・ケイの教育説は、此のニイチエの思想に直接間接影響を受けてをることは云ふまでもなく、又吾が国に於ても、曾て登張竹風・高山樗牛等の徒が、ニイチエの天才主義を唱道して、世人の耳目を驚かしたことは、皆よく人の知つてをるところである。(渡部1918a, 97-98頁)

「ニイチエの教育説」の冒頭で渡部はこのように述べる。講演論文「われわれの教養施設の将来について」やエレン・ケイへの影響に触れている点は小西と重なるが、後期著作『ツアラトウストラ』にもニーチェの教育観を読み取ろうとし、その骨子を「超人主義の教育」と特徴づけている点は小西と決定的に異なっている<sup>註14</sup>。渡部によれば、ニーチェは体系的な教育論を残しているわけではない。しかし、根本思想である「超人」を手掛かりにすれば、ニーチェの教育観が明らかになるというのである。

渡部は次のように述べる。「然らばニイチエは如何なる根本思想に立ち、教育意見を吐露したかと云ふに、それは超<sup>ユーベルメンシュ</sup>人の観念の上にこれを打ち立てたのである。即ち氏に従へば、「超人とは凡俗の社会を超越したところの、至高至大な人物の謂である、強く、勇ましく美しく、而して真面目な、識見群を抜いた、又痛苦を恐れず、思想豊富にして新境地を自ら打開し、善悪てふ如き相対的道德に煩はさるゝことなく、自ら価値の規定者となつていくが如き自由偉大の人格者」である。而して教育は要するに斯くの如き偉大なる個人を造るべく努むればよいのである。」(前掲書、98頁)

ニーチェの教育目標が「超人」であることは引用部から明らかであろう。では、「超人」とはいったい何者なのか。「氏に従へば」以降の引用箇所はニーチェ自身の言葉ではなく渡部の要約であるが、それによれば「超人」とは、「凡俗の社会を超越した」「至高至大な人物」であり、「強く、勇ましく美しく、而して真面目な、識見群を抜いた」「思想豊富にして新境地を自ら打開し」「自ら価値の規定者となつていくが如き自由偉大の人格者」(同上)である。ここには、青年による道德的頹廢行動として展開された1890年代ドイツのニーチェブームや本能満足主義を強調する高山樗牛のニーチェ主義に見られるような「超人」の姿はない。主体的且つ自律的な人格者というのは、教育学的に見ても妥当な理想像だと言えよう。

では、その理想にたどり着くための方法はどうか。「…ニイチエは此の理想を実現せんが為に、如何なる實際教育を念頭に描いたかと云ふに、超人を作るには、其の自由を抑圧せず、其の本性に訴へて、自己修養をさせねばならぬ。そして内部生活を革新して、至誠な道德性を発



揮せしむることを心掛くることが肝要であると。蓋し彼は個性其のまゝの自然助長を主張したのである。其の教育法としては、哲学・芸術等に依て精神的渴望を癒し、芸術的本能を伸張せしめ、古典に依て希臘人羅馬人の世界観人生観を味得せしむることが必要である。と言つてをる。」(前掲書、99頁)——渡部によれば、個性を伸張させ、哲学や古典によって精神性を鍛錬するような「自己修養」こそが、超人の育成方法にはかならない。別の箇所でも「ニーチェの超人主義的教育説の如きは、一種の天才教育である」(前掲書、353頁)とも述べているように、渡部は超人育成を「天才教育」という教育学の文脈において評価しようとしたのである。

## (2) 否定的評価—根本妄想としての「超人」—

渡部はニーチェの「超人」思想が「或る意味に於ては極めて正当なこと」と述べる(前掲書、100頁)。なかでもニーチェが「個性教育天才教育を強唱して時弊を救済せんとしたこと」(前掲書、101頁)を高く評価し、「個人文化の哲学的文明批判の観念からこれを高唱し、大なる意義と使命とを以てこれを強く唱道したのは、氏に優るものはない」(同上)としてニーチェの教育学的意義を認めている。

しかし、ニーチェの教育説には批判すべき点も多かった。なぜなら、ニーチェ思想の教育学的意義はあくまでも「或る意味(相対的意義)に於ての長所」(前掲書、102頁)であって、「此の或る意味を失ふときは、氏の教育説はいさゝかの価値なきものとなるのみならず、寧ろ弊害を醸す虞れすらある」(同上)からである。

たとえば渡部は「天才乃至個性教育の内容感覺主義に傾き、思想粗雑なるは、否定することの出来ぬ事実」(前掲書、101-102頁)と述べ、感覺主義的な傾向を帯びたニーチェの思想を粗雑と批判している。また、「個人教化説の如きも決して十分なものではない」としたうえで、「個性の自由発展」をことさら重視するニーチェの主張は「自然主義的な危険な考方」であるとも指摘する(前掲書、103頁)。さらに、「個人文化を余りに過重せし結果社会文化を余りに軽視し、個体価値を無限に高潮せし結果国家社会価値を余りに無視せしことも、謬想としか受取れない」(前掲書、103頁)とも述べ、社会文化を過度に軽視するニーチェの考え方を端的に誤謬と診断している。

このようにニーチェ思想に対して否定的な評価を続ける渡部は、最終的にニーチェの超人主義的教育説に対して以下のような総合評価を下す。

*根本思想たる超人主義は大部分空想の所産なること。勿論此の思想の中には天才的にして奇抜な、且つ吾人に大なる暗示を与ふるものも無いではない。例へば、時代を超越した人格者たるべきことを、要求するが如きこ*

れである。何となれば吾人は或る意味に於て、否真正の意味に於て、時代を超越した人物とならなければ、真に自己を実現し社会国家に貢献することが少なく、これに反して社会国家に偉大なる貢献をなすには、真正の意味に於て、超人とならねば、これをなすこと不可能だからである。故に、此の点に於ては、千古の真理を有してをると云つても差支ない。併しそれはニイチエの云ふやうな内容の超人であるか否かは速断を許さない。なぜかと云へば、第一に斯かる内容の超人は実際此の世に出現するを望み得るか否か、疑問であり、第二に仮りにも出現を望み得るとしても、果して斯かる内容を有する超人の社会人生は、今日の社会人生よりも幸福であり理想的であるかは容易に断定することを得ないからである。殊に其の権力意志説や道徳排斥論は、吾々には狂人の妄語としか考へられない。否、斯かる道徳上の形式的貴族主義は、現代生活の基調に反するものである。これ要するに氏の理想を以て空想なりとし、氏の根本妄想なりと評する所以である。(前掲書、102-103頁)

このように、超人主義が「学問」や「学説」ではなく「空想の所産」であるという事実を指摘しつつ、「時代を超越した人格者」の必要性を「暗示」している点において、超人思想が「千古の真理を有してをる」ことを渡部は認めている。しかしながら、ニーチェの超人思想をそのままのかたちで教育学に受容する可能性については否定的な態度を見せる。なぜなら、超人はやはり空想の産物であり、その育成についても実現可能性が判然としないからである。こうして渡部は、ニーチェ思想に対して一定の意義は認めながらも、権力意志説や道徳排斥論は「狂人の妄語」以外の何ものでもないと厳しく批判し、最終的にはニーチェの超人思想を「根本妄想」と酷評したのである<sup>註15</sup>。

### 3. 文検参考書におけるニーチェ

#### (1) 出版意図とニーチェの位置づけ

1918年著作『最近教育学説の叙述及批判』収録の「ニイチエの教育説」における渡部のニーチェ評は以上に見たとおりである。渡部によれば、「ニイチエの教育意見は、彼の社会的教育学が、社会文化を主としたるに反し、個人文化の貴重なることを力説して、これが為には個人本位の教育を営むことが、最も大事であることを述べ、文化の最高価値を体現せるものとして、超人を案出し、教育倫理の最高標的と定めた」(前掲書、100頁) 点に最大の特徴があるわけだが、「超人」という教育理想は現実レベルで見れば「妄想」としか言いようがないため、ニーチェの超人主義的教育説は、教育学にとって具体的な検討課題ではあり得ないというのである。

しかし、1917年の論文「ニイツエの学制論」以降ニーチェを見限った小西とは異なり、渡部はその後もニーチェへの言及を続ける。その理由の一つは、ニーチェ思想の影響力の大きさで

あったと考えられる。「ニイチェの教育説」の中で渡部は次のようにも述べている。「此の詩的狂的空想的なる超人の観念は、非難すべき幾多の点を包含するも、現代の人をして恰も彼の妖魔の人を魅するが如く、トルストイの偉大なる人道主義と、ともに、現代の思想界に多大なる影響を及ぼしたことは否定されない」（同上）。——「詩的狂的空想的なる超人の観念」を教育学的に高く評価することはできないが、「妖魔」の如きその影響力は無視できないと判断し、その後の著作論文においてもニーチェ思想を取り上げることにしたのであろう。1918年の著作『文検西洋東洋日本教育史』もその一つである。

「本書は中等教員教育科検定受検者の為<sup>マ</sup>に著したるものなり」（渡部 1918b、凡例1頁）と「凡例」に示されているように、本書『文検西洋東洋日本教育史』はいわゆる「文検」、すなわち文部省師範学校中等教員教育科検定受検者向けの参考書であり、渡部が周囲から揶揄されるきっかけとなった著作である。ただ、渡部は「幾多従来の既刊教育史に無き部分をも収めたれば、一般教育史の研究者及び師範学校教育史科教授参考書としても、裨益する所あるべきを信ず」（同上）とも述べ、教育学者としてのプライドものぞかせている。いずれにせよ、本書が当時の教育学における正統派の入門書であることは疑いを得ないだろう。

さて、本書のうちニーチェが取り上げられているのは、第一部「西洋教育史」の第四篇「最近世の教育」第二章「現今の教育」の第二節「新個人的教育」である。その冒頭で渡部は次のように述べる。「此に謂ふ新個人的教育は、啓蒙時代の理性的個人主義、乃至ヘルバルト一派の主知的・道徳的個人主義思潮とは、異なるものにて、寧ろ十九世紀初葉の新人文主義的思想が、ダーウキン、スペンサー、ニイチェ等の影響を受けて、主情意的個人主義となりて現はれたるものなり。故に予は之れを新個人的教育と呼ぶこと<sup>マ</sup>とすべし。例へばケー、グルリット等の思想中に見る所のものなり。」（前掲書、387頁）——新教育運動で活躍したケイやグルリットに影響を与えた個人主義思想家としてニーチェが位置づけられていることは明らかであろう。では、文部省師範学校中等教員教育科検定受検者に対してニーチェの思想はどのように紹介されたのだろうか。

## （2）1918年著作『文検西洋東洋日本教育史』におけるニーチェ

見出しは「ニイチェ」であり、「根本思想」、「教育思想」、「ニイチェ教育思想の批評」の3部構成となっている。講演論文「われわれの教養施設の将来について」のうちに直接ニーチェの教育観を確認しようとする小西重直とは対照的に、渡部はここでも、教育論に直結しないニーチェの根本思想を確認する作業から着手し、その後ニーチェの教育思想を抽出する作業を行っている。渡部は冒頭でこう述べる。「ニイチェの教育思想を知るには、先づ其の根本思想たる

彼の哲学的人生観を解さざる可からず。則ちニイチエに随ふときは、人生の真状態は自然の差別不平等に在り、之を人間社会に見るに、此の世界には二種の全く相異なるものあり。一は選ばれたる少数の優者にして、一は奴隷及び下僕なり。」(前掲書、388頁)

渡部によれば、ニーチェの哲学的人生観は不平等を是認する差別的な思想であって、ニーチェにおいては「選ばれたる少数の優者」が重要となる。「凡俗の社会を超脱し、強く勇ましく美しく、而も真面目にして識見群を抜き、又痛苦を恐れず、思想豊富にして、新境地をば自ら打開し、善悪といふ如き相対的の道徳に煩はさるゝことなく、自ら新価値の規定者となりて進み行くが如き、至高至大にして、自由なる人格者」——これこそが「少数階級の優强者」であり、ニーチェの言う「超人」にほかならない(前掲書、389頁)。「超人」をニーチェの掲げる理想像と見なし、それを主体的且つ自律的な人格者と捉えるスタンスは、基本的に前作「ニイチエの教育説」と変わらない。

しかし、前作に比べ、より現実世界に引き寄せた解釈を試みる渡部は、その批判の射程を、「空想」や「妄想」と特徴づけられる超人思想の非現実性や非学問性から、超人思想の背後にあるニーチェの差別的な思想へとシフトさせる。すなわち、「劣弱者たる群衆を保護し之を教化すれば、虚弱にして劣俗なる人間の種を増殖し、随て人類を虚弱ならしめ、偉大なる個人の出現に妨害をなす」(同上)という観点から、「群衆を踏台とし、偉大な個人の超人が、思ふが儘に天才を発揮し得る社会」(同上)の実現を目指すニーチェの教育思想を非難するのである。

後期思想のうちにニーチェの根本思想を確認した渡部は、「氏が凡俗教育の普及を如何に誼ひ、超人の爲めの教育を如何に必要とせしかば、次に掲ぐる中学校教育の非難に依りても知ることを得べし」(前掲書、390頁)と述べ、いわば時期を遡及するかたちで、初期思想に見られるニーチェの教育論に言及し、「超人の教育と、凡俗の教育との二制度を設け」(前掲書、391頁)、「低能者及び虚弱者に対しては憐憫・同情を洗ぐこと無く、優强者を目的として教育」(同上)すべしとする差別的で貴族主義的な教育観を批判する<sup>註16</sup>。

ニイチエの思想は、貴族的個人主義と称せらるゝ所のものなり。而して今日まで少からず善にも悪にも誤解せられたる人なり。之れ氏の哲学は其の芸術的作品とも云ふべきものにて、論理上より見るときは如何様にも批評し得るものなればなり。然らばニイチエ教育思想の真価は如何と云ふに、其の個人文化説・天才主義を唱道せる点には、否定す可らざる真理あり。随て教育も一面の任務として大に此の点を顧慮する必要あり。然れども之は、一般的俗衆の教化を不必要とするの理由とはならず。蓋し氏の人間二典型説は、本質的に誤れるものなればなり。又画一教育・一般的教育の中には、多少の弱点もあり。然れども一般的陶冶の真意は、ニイチエの考ふるが如きものには非ず。之れ到底用ふ可らざるの思想なり。(前掲書、392頁)

ニーチェの思想は芸術作品のような性格を有しているがゆえに、よくも悪くも誤解されることが多く、論理的な批判を受けやすいが、彼の個人文化説や天才主義には「新個人的教育」にとって重要な示唆も含まれている。しかし、貴族的個人主義に基づくその「人間二典型説」は一般民衆の教育を不当に軽視する点において「本質的に誤れるもの」であり、一般的陶冶に対するニーチェの批判も、差別的思想に囚われた彼自身の誤解に基づくものであるという。こうして渡部はニーチェの教育思想を「到底用ふ可らざるの思想なり」と診断し、教育学への受容可能性を否定するのである<sup>註17</sup>。

### (3) 試験に出るニーチェ—その後の文検参考書—

ニーチェ思想の教育学の意義はきわめて限定的なものである。むしろ教育学的な見地から判断すればニーチェの考えは根本的に誤謬であり、教育学説として活用する可能性は皆無に等しい。しかし、妖魔の如きその影響力によって個人主義的な発想を教育学にもたらした意義は決して無視できない。こうした背景から、文検受験者も念のためニーチェの教育思想を把握しておくべきである。渡部はそのように考えたのであろう。

たとえば1923年に出版された『文部検定教科受験提要〔七版〕』ではニーチェの教育思想が次のように紹介されている。

#### 甲、ニーチェの教育説

##### 一、根本思想=個人文化の高唱

イ、超人の観念。自己の力に由りて固有の真理に到達し、種々の障害は勿論、同時に社会其のものまでも超越したるものなり。而して社会は此の超人の力に依て導かれ進歩せしめられる。

ロ、社会と個人との関係=社会主義は個人を以て社会の方便と見れど、これは真の関係を洞察せるものにあらず。何となれば群衆はそが中の偉大なる個人に依てのみ導かれ、社会文化は超人の力に依てのみ進歩せしめらるればなり。

##### 二、教育実際上の意見

イ、児童の個性尊重

ロ、天才俊才の助長

##### 三、ニーチェ教育説批評

###### 長所

イ、教育の凡俗化画一化に一大刺激を与ふ。

ロ、穎才發揮を鼓舞する点識見高邁。

短所

- イ、余りに個人文化を重視せし結果、社会文化を軽視し、個人価値を重視するの結果社会国家を冷視す。
- ロ、規範を認めざるより自然主義となり、人間の社会生活を紊るゝとなり、遂には個人其のものをも亡ぼすに至る。
- ハ、穎才教育は極めて必要なることなれども、感覺的自我と精神的自我とを混同せる氏の説は危険なり。

(渡部 1923c, 95-96頁)

「超人」に象徴される根本思想を確認したうえで、次に教育観を抽出し、最後にニーチェ思想を教育学的に評価するという構成であるが、目を引くのは、長所に比べて短所に紙幅を割いている点である。とりわけ短所の最後で、あらためてニーチェ思想の危険性を指摘した点は特筆すべきであろう。文検の出題者は教育学関係者<sup>註18</sup>であって、当然のことながらニーチェに対して厳しい評価を下す人も少なくない。こうした事情を踏まえ、渡部は文検受験者に対して、高山樗牛のような熱狂的ニーチェ主義に陥るのではなく、ニーチェ思想の教育学的意義を客観的に評価し、その危険性を冷静に見極める教育者としての洞察力も身に付けるよう求めたのである。

ただ、渡部はニーチェ思想の危険性に警鐘を鳴らしつつも、1929年の『提要文検教育科の組織的研究』や1935年の『提要文検教育科の組織的研究』において、ほぼ同一内容でニーチェの思想を紹介している。それはやはり、当時の教育学において——その妥当性や実現可能性は別として——ニーチェ思想の影響力が無視できなかったという時代背景があったからであり、実際、「現今の個人的教育説の要点を挙げて之を批評せよ（二九回予）」（前掲書、95頁）という出題実績が過去にあったからである<sup>註19</sup>。再版・重版も含め、渡部は文検受験者用の参考書を多数出版するが、それらを見る限り、ニーチェは「個人的教育説」というカテゴリーの中で定位置を確保していたと言える。

#### 4. 辞典におけるニーチェ

特定の外来思想がある学問に受容されたか否かをはかるバロメーターの一つとして、ディシプリンの象徴的存在たる専門辞事典への掲載の有無や内容を参照することは有効であろう。ここでは、渡部が単著として出版した1924年の『最新哲学辞典』と、守屋貫秀との共著で出版した1930年の『最新教育辞典』を取り上げ、各辞典においてニーチェや関連用語がそれぞれどのように掲載されているのかを具体的に見てみよう。

### (1) 『最新哲学辞典』

「本書は紳士・学生・文検受験者並に一般民衆の文化的・哲学的修養の伴侶たらしめんことを目的として編纂したものである」（渡部 1924d、凡例 1 頁）とあるように、『最新哲学辞典』も文検受験者が読者として想定されている。本書に掲載されているニーチェ関連の語句は、「超人」と「ニーチェ」である<sup>註20</sup>。

「超人」については次のように説明されている。「普通の人類以上の人間の謂。独逸の熱狂的哲学者ニーチェの説。即ち彼れは強烈なる自我中心の個人主義を力説して、飽まで自我を発達させ、自我の力を以て多くの人を征服し得るが如き強者とならんことを力説した。その理想人が則ち超人である。（ニーチェの條参照）」（前掲書、308頁）——ニーチェを「熱狂的哲学者」と紹介していること、また「超人」を「自我の力を以て多くの人を征服し得るが如き強者」と支配者のようなイメージで説明している点は従来にない特徴だが、ニーチェの個人主義的な理想こそが「超人」であるという捉え方自体は変わらない。では、ニーチェはどう説明されているのだろうか。以下、全文を引用する。

ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900)

【略伝】独逸国ザークセンに生る。初め僧侶となる目的で、ボン及びライプチツヒ大学で神学を修めた。後瑞西のバーゼル大学で文献学を講じて居る中に、精神病の徴候が萌したので専ら静養に力を盡した。されど彼は其の間も断えず著作に従事したので、遂に救ふ<sup>マ</sup>かべからざる精神錯乱に陥つて、悲惨なる死を遂げた。彼は詞藻豊富で、行文頗る縦横を極め、「悲劇の由来」・「善悪の彼岸」・「ツアラトウストラ如是観」等の有名なる著書を残した。

【思想】彼の思想は、ショーペンハウエルの主意説を根柢とし、コムトの実証論、ダーキンの自然淘汰説、マルクスの唯物史観及びシユミットの極端なる個人主義等を探つて、以て其の基礎としたものである。而して其の認くところは、権力意志を最高至上の原則とした、強者本位の道德であつた。無論彼はこれを組織的に述べたのではなかつた。たゞ断片的に、また多くは比喩的に述べたものであつた。

彼の根本思想たる「権力意志」の観念は、ショーペンハウエルの「生活意志説」を積極的に改造したものである。ショーペンハウエルは、世界の本体を盲目的な生活意志なりとし、其の意志を否定する解脱の方法を説いた。然るにニーチェは、ショーペンハウエルの消極的解脱観を排し、生活本能の満足<sup>マ</sup>を以て人生の目的とした。而して彼は、「あらゆる生物は生存の欲望を有し且つ自己の力を發揮しようとして居る。道德は畢竟この生活本能を根源として発するものに外ならぬ。人生の目的は自己の権力を拡張して、生活本能を満足せしむる点にある。人は猿猴より進化したるものであるが、それと同様に人は将に人を超越せなければならぬ」と、これ有名なる彼の超人（Übermensch）論である。彼は更に、「善は力である。悪は

力の弱いことである。故に吾人は自己の権力を拡大させねばならぬ。よろしく勇敢なれ。攻めよ。戦へ。神を恐れるな。死を怖れるな。卑怯未練は最悪で最醜である」と説いて居る。しかしながら彼は本能を肯定はしたが、情欲の奴隷となることは愚としたから、純然たる本能満足主義ではない。

彼は上述の如き思想を以て、当時の道徳・宗教・制度・文明を観察し、これに峻酷なる批評を下した。要するにニーチェの思想は、個人主義・権力主義・唯物論・無神論である。(前掲書、339-340頁)

「超人」の項目に比べてかなり長文であることは一目瞭然であろう。「略伝」→「思想」というシンプルな構成であり、代表的著作としてはじめて『悲劇の誕生』（「悲劇の由来」と『善悪の彼岸』が挙げられている。ニーチェの根本思想として「権力意志」が前面に出てきてはいるものの、依然として「超人」の果たすべき役割は大きい。それは「超人」が理想を示すキーワードとして好都合だからであろう。

興味深いのは、ニーチェ思想が単なる本能満足主義ではないことを付言して、高山樗牛のような熱狂的ニーチェ主義によって蔓延したニーチェへの誤解を解こうとしている点である。また、全体を通じてニーチェ思想に対する否定的評価も見られない。教育学にとっては問題のありそうな「権力主義」や「無神論」も、教育学の外部に位置する哲学にとっては許容範囲だったということなのだろう。

## (2) 『最新教育辞典』

『最新哲学辞典』の姉妹編として出版されたのが、守屋貫秀との共著『最新教育辞典』（1930）である。序文によれば、「渡部と守屋とは、それぞれ得意な方面を分担して、分量から申しても半々位づ、執筆してをる」（渡部・守屋 1930、序2頁）とのことだが、項目毎に執筆担当者がどちらかなのか明記されていないため、出典表記は連名とする。

「凡例」によれば、「本書の内容は、教育学原論・教授法・各科教授法・訓練法・管理法・西洋教育史・東洋教育史・日本教育史・最近教育思潮・教育哲学・心理学・論理学は言ふまでもなく、生物学・社会学・倫理学・美学・哲学・宗教・政治・経済等の基礎学と、苟も教育に関係あるものの重要なものは、皆これを採らんことに努めた」（前掲書、凡例1頁）ようである。教育に関する用語は可能な限り掲載したというだけあって、その射程は広範囲に及んでおり、ニーチェの登場回数も『最新哲学辞典』よりむしろ多くなっている。

語句説明の中で部分的にニーチェへの言及がある項目としては、「ケイ」（前掲書、174頁）、「個人主義（教育上の）」（前掲書、243頁）、「個人的教育思潮」（前掲書、244頁）、「主意説」（前掲書、329頁）、「新個人的教育学」（前掲書、369頁）、「生命哲学」（前掲書、413頁）、「天才主義」



(前掲書、508頁)があり、ニーチェに直接関係する項目としては、「権力意志」、「超人」、「ニーチェ」、「ニーチェ主義」が挙げられる。「権力意志」と「ニーチェ主義」は『最新哲学辞典』未掲載の新たな項目である。

「権力意志」とは「他を圧倒してより多く、より大に、より強くならんとする意志」であり、「ニーチェのこの考は、シヨーベンハウエルの生きんとする意志に、ダーウインの自然淘汰や生存競争の思想を付加して形成したもの」と説明することが可能だという(前掲書、330頁)。また、「文化教育学者シユプランガーは、政治家的人間を目して、権力型の個性所有者と云つてをるが、それは要するに権力意志を中心とするものに他ならない(同上)とも述べ、「権力意志」と教育学との関連についても言及している。

一方の「ニーチェ主義」は、「ニーチェの主張した強者本位の道徳を遵奉する主義」(前掲書、531頁)と定義づけられているが、ここでのニーチェの捉え方は「シヨーベンハウエルの消極的解脱観を排して、生活本能の満足をもて人生の目的とした」(前掲書、531-532頁)というものであって、「純然たる本能満足主義ではない」(渡部 1924d、340頁)とする前作『最新哲学辞典』の解釈とは異なる。渡部と守屋のいずれが本項目を執筆したかは不明だが、少なくとも『最新教育辞典』においてはニーチェの「個人主義的権力主義」(渡部・守屋 1930、532頁)が本能満足主義として道徳的に低く評価されているのである。

続いて「超人」を見てみよう。『最新哲学辞典』において「自我の力を以て多くの人を征服し得るが如き強者」(渡部 1924d、308頁)と説明されていた「超人」は、『最新教育辞典』においても「人間が実在の本質たる権力意志を最高に表現したもの」(渡部・守屋 1930、494頁)と定義づけられており、基本的には権力主義的志向を帯びた一種の理想像として描かれていると言える。しかし、その一方で「ニーチェの超人なる概念には、二つの方向がある」として、「(一)は個人としての超人で、(二)は人類全体がかくの如き状態に迄高まること」という具合に、「超人」概念の多義性ないし多面性を意識した説明を加えたり、その「内包的属性特徴」として「自律的道徳の創造者で芸術的にも優秀な、そして剛健敢為、俗衆一般へ文化的に君臨するが如き天才」を挙げつつ、「超人」を「道徳的理想」や「教化上の理想」と捉えたりもしており(同上)、教育の文脈を意識した説明となっている。

では、ニーチェその人はどのように説明されているのだろうか。以下に全文を引用する。

ニーチェ *Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900)*

【略伝】フリードリッヒ ウェルヘルム ニーチェは独逸のザクセンに生れ、初めは僧侶となる目的で、ボン・ライプツヒ等の大学で神学を修めた。後瑞西のバーゼル大学で文献学を講じてゐる中に、精神病の徴候

が萌したので、専ら静養に力を盡した。しかし、彼はその間も絶えず著作に従事したので、遂に救ふべからざる精神錯乱に陥つて、遂に悲惨なる最期を遂げた。著書には「悲劇の由来」・「善悪の彼岸」・「ツアラトウストラ如是観」等がある。

【根本思想】彼の哲学的人生観から言へば、人生の真状態は自然の差別・不平等にある。而してその差別を二種に分けて、その一を少数なる優者とし、他を奴隸及び下僕とした。この二者は其の程度に於て差別があるばかりでなく、其の性質に於ても亦差別があるとした。而して彼は、人類社会が大なる発展向上をなすには、少数なる優者が、俗衆を超脱した時に、実現すると言つた。即ち「凡俗の社会を超脱し、強く、勇しく、美しく、然も真面目にして識見群を抜き、又痛苦を恐れず、思想豊富にして、新境をば自ら打開し、善悪と言ふが如き、相対的の道德に支配されることなく、自ら新価値の規定者となつて、進み行くのが自由なる人格者である。」と言つてゐる。彼は、斯の如き人間を称して超 人 uebermensch<sup>ユーベルマンシュ</sup>と呼んでゐるのである。

彼の理想社会は、即ち超人の社会である。換言すれば、群衆を踏台とし、偉大なる超人が、思ふがまゝに天才を発揮し得る底の社会である。故に彼は、此の兩者の間隔の益々大なることを欲した。随て、教育を最下層にまで普及して、群衆を保護するが如きことには、大いに反対したのである。

【教育思想】彼の根本思想が、既に前述の如きものであるから、彼は俗衆を対象とする社会本位の教育を排し、キリスト教の道德を非難した。即ち「現代の教化は人を誤りたる方向に導き、獷猛なる野獸性を有してゐた人間を、柔順なる家畜に変じ、尊大にして君主的であつた自然人を、頹廢の人間にまで低下せしめた。」と言ひ「高き教育は、僅少なる又特別な者にのみ施さるべきものである。蓋し総て大且つ美なるものは、共同の財産となるものでないからである。平等主義・画一教育は、真の教化を衰減せしめるものである。」とも言つてゐる。

要するに、氏は徹頭徹尾天才主義・貴族主義の教育を主張したのである。然らば、その現実の方法は如何にと言ふに、超人の教育と、凡俗の教育との二制度を設け、超人の教育としては、低能者・虚弱者に対して憐憫・同情をそぐことなく、優強者を目的として教育し、主義としてはその自由を抑圧しない。本性に訴へて自己修養をなさしめ、内部生活を革新して、至誠なる道德性を發揮せしめるやうに導き、哲学・芸術等に依つて、精神的渴望を癒し、芸術的本能を伸張せしめ、古典に依て希臘・羅馬の世界観・人生観を味得せしむべしとなしたのである。

【批評】ニーチエの思想中、其の個人文化説・天才主義を唱道した点には、否定すべからざる真理がある。随て教育も、一面の任務として、大いにこの点に顧慮する必要がある。しかし之れは一般民衆の教化を否定する理由にはならぬ。蓋し、氏の人間二典型説は、本質的に誤つてゐるものである。又画一教育・一般的教育の中には、多少の弱点もある。しかし、一般的陶冶の真意は、ニーチエの考へるが如きものではない。(前掲書、531頁)

一瞥しただけでも明らかなように、『最新哲学辞典』以上に長文である。「略伝」→「根本思想」→「教育思想」→「批評」という流れでニーチェ思想の教育学的意義について述べられているわけだが、とくに新たなニーチェ解釈は見られない。「自然の差別・不平等」をニーチェの根本思想と捉えた点、また「超人の教育と、凡俗の教育との二制度」をニーチェの教育思想の骨子と見た点、さらに「氏の人間二典型説は、本質的に誤つてゐる」と批判した点などを踏まえれば、1918年に出版された『文検西洋東洋日本教育史』の内容をほぼそのまま踏襲していると言える。

ただ、従来よりも批判はやや控えめの印象がある。具体的に言えば、「氏の人間二典型説は、本質的に誤つてゐる」と「一般的陶冶の真意は、ニーチェの考へるが如きものではない」という部分が批判点として指摘できるだけで、従来の文検参考書で見られたような、「之れ到底用ふ可らざるの思想なり」（渡部 1918b、392頁）や「氏の説は危険なり」（渡部 1923c、96頁）といった強い否定的評価は見られない。なぜ文検参考書よりも『最新教育辞典』におけるニーチェ評価は甘くなったのだろうか。

辞事典はたしかに、ある学問への受容の程度をはかるバロメーターとして機能する面はある。しかし、独立項目の場合、通常の著作とは異なり、ある程度文脈から自由であるという特徴もあろう。たとえば、教育学辞典にニーチェが掲載される場合、教育学関連という大きな枠の圏内にいったん入ってしまえば、ニーチェは「ニーチェ」というカプセルに包まれるため、教育学からの厳しい審問から逃れられるという側面もあるのではないか。つまり、教育学とニーチェ思想の関連を詳細に説明せずとも、教育学辞典でニーチェを取り上げることは十分に可能と考えられるのである。1930年の『最新教育辞典』におけるニーチェの露出が1924年の『最新哲学辞典』より多い点も、その証左と言えるかもしれない。

## 5. 渡部政盛の教育学におけるニーチェ受容の特質

### （1）渡部政盛のファイナルアンサー——ニーチェの超人主義的教育説一

ケイやグルリットらに代表される正統教育学者を前面に出した「超人」抜き文脈においては、「文化的個人主義」（渡部 1921a、225頁；227頁）、「個人的教育主義」（渡部 1923c、95頁／渡部 1933a、438頁）、「個人本位の考」（渡部 1923d、50頁）、「個人文化主義」（前掲書、64頁）、「新個人主義的教育思想」（渡部 1924c、360頁）、「新個人主義派」（渡部 1933a、436頁）といった言葉とともに、ニーチェが個人主義教育学者の列に加えられている。もともと教育学者ではないニーチェも、「個人主義」というラベルを身に纏うことで教育学に受容可能な存在となったのである<sup>註21</sup>。

しかし、個人主義をことさら強調する文脈では、ニーチェの存在感がさほど大きくはない。主役はあくまでもケイやグルリットであって、ニーチェの思想はまるで彼ら正統教育学者に栄養分として消化吸収されてしまっているかのようである。つまり、個人主義的教育学の文脈では、ニーチェ思想に言及しなければならない必然性も、ニーチェらしさやニーチェ思想の意義も、ほとんど示されないままとなっているのである。実際、渡部の作品全般を見渡してみると、ニーチェが登場しない著作論文の数は決して少なくない<sup>註22</sup>。個人主義的教育学の解説だけならば、ニーチェの名前を出さずとも十分に可能だからである。

それでもなおニーチェの名前が出てくる例があるとすれば、それは「超人」提唱者としてのニーチェであろう。少なくとも渡部にとってニーチェの思想と言えば、よい意味でも悪い意味でも「超人」であった。「超人」こそがニーチェ思想の意義やオリジナリティを示す象徴的思想であり、教育学に受容可能かどうかは別として、ニーチェの教育思想を「超人」抜きで語ることはできないと考えたのである。「超人」を前面に出してニーチェの教育思想を捉える姿勢は、1932年の著作『最新西洋教育史講義』や1933年の著作『教育科講座』においても変わらない。

渡部によれば、「超人」とは「完全至極の人間の意味」（渡部 1932a、539頁；渡部 1933a、667頁）であり、「凡俗の社会を超越し、強く勇ましく美しく而して真面目で、識見群を抜き、また苦痛を恐れず、思想豊富で、新境地を自ら打開し、善悪と云ふ相対的道德に煩はさるゝことなく、自らあらゆる価値の規定者となつて進み行くが如き、至高至大にして自由なる人格者」（渡部 1933a、667頁）であって、「ニイチェはかゝる人間を以て道德の理想となし、且つ教化の理想とした」（渡部 1932a、539頁）。このこと自体に問題はない。

しかし、「偉大なる個人即ち超人が群衆を踏台として思ふが儘にその天才を發揮し得るが如き社会を以て、自然でありまた当然の社会と見做し、かゝる超人を以て最も尊敬すべきものとなし、俗衆を以てそれがための手段方便と見た」（同上）ことには、大きな問題点があるという。なぜなら、群衆や民衆を超人出現のための手段と見なすような発想は、教育学や教育者にとって決して許容できない差別的な思想だからである。

渡部は次のように述べる。「ニイチェの道德教育思想は、上掲の超人を造つて社会を導かせ、思ふ存分に文化創造を営ましむる所に在つた。ニイチェは超人主義必然の結果として、超人と俗衆との間隔の益々大なることを希求し、随て劣俗なる群衆のなまじつかなる発展を無用有害となし、それがための保護や強化はこれを斥けた。この点から、基督教を以て弱者、劣者のための道德にして真の道德にあらずと難じ、社会本位の凡俗教育、画一教育を攻撃した。」（前掲書、539-540頁）

たしかに、「教育の凡俗化、画一化に一大刺激を与へ」「穎才教育を高潮した点」（渡部

1933a、668頁) などについては、ニーチェ思想に一定の教育学的意義を認めることはできる。「要するにニイチェの教育思想は、単なる個人主義ではなくて貴族的個人主義であり天才主義である。内容は著しく主情意主義的で、新人文主義的である。自由主義、文化的英雄主義たる所以茲にある。」(渡部 1932a、541頁) ——しかし、「社会文化を軽視し、国家社会を冷視」する点、「規範(道徳)を認めない為自然主義に陥り、遂には社会生活を棄し、個人そのものをも亡ぼす」点などについては問題があり、最終的に渡部は「感覺的自我と精神的自我とを混同せる氏の説は極めて危険である」(渡部 1933a、668頁) との結論を出すことになる。

ニーチェの根本思想を踏まえつつその教育説ないし教育思想を特徴づけるとき、「超人」は外せない。渡部は判断したのだろう。ニーチェの教育説には、個人主義的教育学というオーソドックスなラベルではなく、「超人」という唯一無二のニーチェらしさが不可欠だったのである。ニーチェの教育思想を「超人」推しで語ることはできないが、同様に、「超人」抜きでニーチェの教育思想を語ることも難しい。ニーチェ思想の教育学的意義に関して渡部が出したファイナルアンサーは、このようにアンビヴァレントなものであった。

## (2) 非教育学的存在としてのニーチェ—千葉命吉との親和性／ペスタロッチとの対比—

ニーチェ思想を教育学的に評価しようとした場合、その根本思想である「超人」に触れないわけにはいかない。しかし、「超人」は、緻密な論理に基づく学説というよりはむしろ「空想」や「妄想」であり、また公共の福祉に役立つような教育目標というよりはむしろ民衆や社会を不当に軽視する差別的な思想である。すなわち、ニーチェの超人主義的教育説は、学問的でも教育的でもないという二重の意味において、非教育学的であると言わざるを得ないのである。渡部はこうしたニーチェ思想の非教育学的な性格をどのように捉えていたのだろうか。

1918年の時点で渡部がニーチェを「詩人的哲学者」と認識し『ツアラトゥストラ』を「文学的作物」と呼んでいたことはすでに確認したとおりだが、渡部は元来ニーチェを「学者」とは認識していない。たとえば1921年の著作『現今改造的教育思潮批判』の中で渡部は次のように述べる。「先づ便宜上所感から述ぶるに、千葉氏の一切衝動悉皆満足の創造教育論は、學術論ではなくて散文詩であること。文學論的教育論であること。又氏の教育宗教とも目すべきものなることである。余は千葉氏の文を読むごとに、彼のニーチェのツアラツストラを思ひ出さぬ訳にはいかない。随てこれに対しては、論理の上からかれこれと言ふのが既に間違つてをるとも言へる。宜しく此の種ものは、感情的に味読すべきものである。味うべき思想である。學問ではない。」(渡部 1921c、176頁)

千葉命吉(1887-1959)<sup>註23</sup>の一切衝動皆満足論が学問よりもむしろ文学に近いことを指摘する

のにニーチェの『ツァラトゥストラ』を引き合いに出していることは明らかであろう。渡部に言わせるなら、ニーチェの教育説はあくまでも感情的に味読すべき「思想」であって、「学問」ではないのである。

同様に、ニーチェ思想の非教育的性格については、ペスタロッチとの対比において示される。村中兼松との共著『精神貧困児の教育』（1935）の「序」は次のような書き出しで始まっている。「ニーチェは、超人主義、天才主義を唱道して、凡俗やそれ以下の教育を斥けたが、ペスタロッチーは、その反対に弱者や貧しき者や愚かなる者の救済や教育を大いに鼓吹し、自ら熱烈なる精神を以てその実践に従事した。前者は恐らく悪魔の叫びで、後者は神の態度であらう。」（渡部・村中 1935、序1頁）

ペスタロッチのような教育者の視点がニーチェに欠けていることを指摘した内容となっているが、注目すべきは、「神の態度」と賞讃されたペスタロッチに対して、ニーチェの思想が「悪魔の叫び」と酷評されている点であろう。「フアツシヨ主義流行のためか、日本の教育界も、どうやら英雄主義的色彩が濃厚で、精神貧困児の教育と云ふが如きことは、近頃とんと忘れられたかの如き観がある。文化国日本がこんなことでのいゝのか、教育国日本がこれで辱しくないのか。」（前掲書、序2頁）——渡部・村中はこのような問題意識から、いわゆる知的障害児教育の重要性を訴える。

「精神貧困児の教育と云ふものは、第一に人道とか人間愛とか云ふ点から考へてこの上なく必要なものである。カントは言つた。「人格は目的として取扱へ、決して手段として取扱つてはならぬ」と。前に述べたニーチェの超人主義教育論の如きは、このカントの命法に戻るところがないかどうか。彼れの考は、天才者教育のためには、低劣等児の如きやくぎなもの、どうなつてもよい。否、その如きものは進んで淘汰するがいゝとさへも云ふ考である。」（前掲書、11頁）——渡部・村中はこのように述べた上で「かりに自分が劣等児であつた場合、誰かにかゝる主義主張をなされて、それで満足なのかどうか」と問い、「恐らくさうは感じ得ないであらう」と答える（同上）。

「精神貧困児！それは人道より見る時はこの上なく可憐なものである。ふびんなものである。（…略…）いつも日陰ものとして陰惨な生を送らねばならぬ運命下におかれてをる。これ程いぢらしきことがこの世にまたとあらうか。」（前掲書、11-12頁）——こう訴えたうえで、「わしは貧しい者が可愛い」、「それよりもおろかなものは更にいぢらしく可愛い」という「教聖ペスタロッチーの言をおもひ出さずにはゐられない」と述べる（前掲書、12頁）。

篠原助市は「教育者としてのニーチェ」という表記を用い、哲学者ニーチェの教育的意義はペスタロッチにも比肩しようと評価しているが（篠原 1930、418頁）、少なくとも渡部と村中

の両者にとってニーチェは、教聖ペスタロッチの対極に位置する非教育的な「悪魔」にすぎなかったのである。

### (3) 教育学の外部からの示唆や刺激—「見出し語提供者」としての役割—

以上に見たとおり、渡部にとってニーチェは紛れもなく非教育学的な存在であった。だが、1917年の論文「ニイツェの学制論」以降ニーチェを完全に見限った小西重直とは異なり、渡部は最後までニーチェを見捨てることはなかった。それは、ニーチェの思想に何らかの可能性や魅力を感じていたからであろう。その一方で、篠原助市や中島半次郎のように、ニーチェの人格に目を向けてニーチェの教育学的意義を包括的に捉えようとする姿勢も見られない。渡部にとってニーチェは教育学者でも教育者でもなかったからである。問題は、非教育学的なニーチェ思想の可能性や魅力を教育学にどう生かすかであった。

非教育学的なニーチェ思想の教育学的意義をどう示すか。こうしたアポリアに直面したとき渡部が採った方法は、教育学の内部にニーチェ思想を受容するのではなく、教育学と一定の距離を取り、外部から刺激を与えるような関係性を築くことであった。ニーチェの思想は悪魔的であり教育学には到底受容できないが、だからこそ教育学そのものに対するインパクトや意義があり、教育に携わる教育学者や教師に示唆や刺激を与えることはできるのではないか。教育学へのニーチェ思想の受容可能性を消極的に見ていた渡部が完全にニーチェを見限らなかったのは、以上のような理由によると言えよう。

たとえば1929年の自伝的著作『若き教育者に与ふる書』の中で渡部は次のように述べている。「ニーチェは「超人」なる理想を掲げて凡俗主義に墮することを警めた。超人とは価値性の豊富な力の強い個性の顕著な人間である。換言すれば偉大なる個人である。凡俗を超越したところの文化的権力的偉人である。高山樗牛は「須らく吾人は現代を超越せざるべからず」と叫んだ。このニイツェの超人なり、高山樗牛の現代超越なりが、少なからず現代に於て必要とするところがあるではなからうか。中にも教育者中に、かゝる超人的風格のある人間が欠乏してをるではあるまいか。」(渡部 1929c、135頁)

教育学の内部においては不平等を是認する差別的な思想として批判された「超人」が、ここでは「価値性の豊富な力の強い個性の顕著な人間」や「凡俗を超越したところの文化的権力的偉人」という肯定的なイメージで捉え直され<sup>註24</sup>、教育者の中に「超人的風格のある人間が欠乏してをる」状況の方がむしろ懸念されている。「今後の教育者は、何を措いても自己自身先づ自己の人格を偉大ならしむることを努めなければなるまいと予は思ふのである。」(前掲書、137頁)——渡部はこう述べてもいるが、これは自己修養を通じた「超人」化を教育者に要求

するメッセージと解すべきであろう。

また、1937年の著作『日本現代の教育学』では、医学や自然科学に比べて教育学の研究水準が停滞している点を指摘した上で<sup>註25</sup>、「要は優秀なる人物が教育学界にはいつて来ないと云ふ点に主なる原因があるではないか」（渡部 1937d、544頁）と述べ、次のように続ける。「日本に特色ある教育研究が起らず<sup>註26</sup>、一律なものばかりであると云ふことは、日本の教育学界に自由思想家がをらないと云ふ点から来ると思ふ。また、よい意味に於ての変人がないと云ふ点に原因してをると考へる。而してかゝるよい意味の変人や自由思想家の現れない理由は、官学万能であり社会がデモクラチックでない点から来てをる。裏面から言へば、国家統制がきゝ過ぎてをるためである。国家統制がきゝ過ぎ、学問や思想までが官許を受けねば自由に育ち得ない状態にあるのだから、偉大なる教育学や突つ込んだ教育研究の出られよう筈がない。基石の如くにだれもこれも小さく円く形ち造らされてしまふのである。」（前掲書、545頁）

「よい意味の変人」や「自由思想家」というのはまさに「超人」のイメージに符合すると見えるだろう。渡部によれば、型にはまらない自由な発想で教育研究を行う「超人的風格のある人間」（渡部 1929c、135頁）の出現こそが偉大なる教育学の発展に繋がるわけだが、官学万能の社会においてはスケールの小さな教育学しか出てこられず、結果的にスケールの小さい画一的な人間しか養成することができないのである<sup>註27</sup>。

*小さな教育学からは小さな人間しか出ない。平凡な教育学からは平凡な人間しか現出しない。特色のない画一的な教育学からは、特色のない鉄砲弾のような人間しか出る筈がない。試みにニーチェをして現代の日本によみがへらしめたならば何と云ふであらう。「人間的な！人間的な！！あまりに人間的な！！」と言ひはしないかどうか。茲に人間的とは人為的・非自然的と云ふことである。また、ルソーをして復活せしめたならば何と云ふか、「人間は神の手を離れた時には自由なりき、日本と云ふ社会の手に渡り、学校の門を去るに及び、全く特色なき自由なき人間となり了せり」と言ひはしないかどうか。とにかく日本の教育学と云ふものは、どう見ても偉大なる人物を養成するには適してゐないようである。それ程左様に虚勢された千べん一律化されたものになつてをる。（渡部 1937d、546頁）*

「特色のない鉄砲弾のような人間」しか養成し得ないスケールの小さな教育学に対して「人間的な！人間的な！！あまりに人間的な！！」とニーチェ自身に語らせていることは明らかである。ニーチェが「超人」出現を望んだこと——少なくとも渡部がそう理解していたこと——を踏まえれば、渡部は、ニーチェの著作『人間的な、あまりに人間的な』のタイトルを援用しつつ、日本の教育学界に「超人的風格のある人間」や「よい意味の変人」が現れることを強く



希望したと言えるであろう。

教育学の内部に取り込もうとした途端、「超人」は「人間二典型説」の一極をなし、対極にある民衆教育を軽視する差別的な思想へと変貌してしまうため、ある程度の親和性が認められていた個人主義的教育学の文脈においても受容不可能という結論が突きつけられていた。しかし、教育学の外部においては「超人」が「価値性の豊富な力の強い個性の顕著な人間」や「凡俗を超越したところの文化的権力的偉人」となり、その非教育学的な性格も免責されるため、一教育学説の枠内を超出して、教育学そのものの存在意義や方向性を規定するほどのインパクトを発揮しうることになる。

「吾人学習の理想は、最大可能としての自己を実現する点に在る。ニイチエの言葉で言ふならば、超人となるに在る。」(渡部 1925a, 335頁)とか「ニイチエの言ふ「超人」の如き独立的な、創造的な清新な人間」(渡部 1933b, 56頁)といった受容例からもうかがえるように、「超人」は、既存の枠組みや価値観を超越することの重要性を訴える上で非常に使い勝手のよいキーワードであった。渡部にとってニーチェはまさに「見出し語提供者 (Stichwortgeber)」(Pronczynsky, S.70) だったのである<sup>註28</sup>。

## おわりに

本稿を締めくくるにあたり、渡部政盛の教育学におけるニーチェ受容の意味を検討しておくことにしよう。

第一に、渡部が「超人」推しのニーチェ解釈を見せているという点である。たとえば1922年の『教育辞典』にニーチェを掲載した点に関しては篠原助市に先駆的意義があるが、ニーチェのみならず「超人」も独立項目として掲載した点に関しては、1930年の『最新教育辞典』に先駆的意義がある。また「超人」の教育学的解釈はすでに1914年に出版された中島半次郎の『人格的教育学の思潮』の第8章「個人的教育学派」にも見られるが<sup>註29</sup>、「ニーチェの超人主義的教育説」(渡部 1918a, 353頁)や「ニイチエの超人主義教育論」(渡部・村中 1935, 11頁)といったパワーワードを用い、否定的な評価も含め、一貫して「超人」を軸にニーチェ思想の教育学的意義を捉えようとした点に関しては、他に類を見ない渡部の特徴である<sup>註30</sup>。教育学にとってよいとか悪いとかではなく、まさに善悪の彼岸でニーチェらしさを追求し、「超人」こそがニーチェ独自の教育思想であると渡部は判断したのである。

第二に指摘できるのは、上述の点とも関連するが、非教育学的な性格を有するニーチェ思想と教育学との関係性を考えるうえで渡部の受容例が興味深い示唆を与えてくれるという点であ

る。というのも、渡部における「超人」評価の多面性は、ニーチェ思想と教育学との複雑かつ微妙な関係性を象徴していると考えられるからだ。

渡部のニーチェ解釈によれば、「超人」は基本的に自己修養の目標であって、これ自体には何の問題もない。ただ、教育学の内部に取り込もうとした途端、「超人」に付随する弱者切り捨てる的な差別的な思想がネックとなり、結果的にニーチェ思想は「悪魔の叫び」、すなわち受容不可能な危険思想へと変貌する。しかし、無理に教育学の内部に取り込まなければ、「超人」は時代の閉塞感や既存の枠組みを突破し、偉大な教育学の構築を目指すスローガンとなる可能性をも秘めている。なぜなら、教育学の外部では内容的にも形式的にもニーチェ思想の非教育性が免責され、影響やインパクトの射程も拡張されるからである。

小西重直が教育学者の立場からニーチェの学制論を酷評し、早々にニーチェ思想を見限ったことはすでに述べたとおりである。それに対して渡部は、自分自身が教育学の周縁を逍遥していたこともあってか、教育学の内と外の両方を視野に収めつつ、俯瞰的な立場でニーチェ思想の教育学的意義を見出すことができた。ニーチェは、無理に教育学の内部に取り込もうとするのではなく、教育学の外側に置いてこそ教育学そのものを揺るがすような存在となり、やや逆説的ではあるが、そこにこそ非教育学的なニーチェ思想の教育学的意義が認められる。渡部は、教育学の内部に参入できない異端者<sup>註31</sup>としての自分とニーチェとを重ね合わせていたのかもしれない。

## 【註】

註1 『最近教育学説の叙述及批判』の表紙と奥付には、渡部ではなく渡邊とある。

註2 息子の渡部晶は本書について次のように述べている。「例えば『日本現代教育学大系』という本があるんですが、それを見ると当時の日本の教育学者、たとえば小西重直、吉田熊次、福島政雄などがずらっと並んでおりますが、その中に渡部もちゃんと入っているんです。何故入ってたかという、自分が編集しているんです。自分が編集して、ちゃんと自分が入って、そして『日本現代教育学大系』として出版されているんです。これはなかなか賢い方法だと思います。知名度はそれによって随分広まったと思うんであります。」(渡部晶、79頁)——ちなみに『日本現代教育学大系・第2巻』には、渡部政盛の他に、谷本富、小川正行、福島政雄が取り上げられている。

註3 自伝『異端者の悲しみと歎び』の中で渡部自身も次のように述べている。「已に書き記したる如くに、彼れには学校歴と云ふものはない。学歴はある。学歴とは生れてから今日に至るまで三十有余年間の自己学習これである。が世人が一般に云ふ学歴一学校歴一それはないのだ。彼れの学校歴はたつた一つある。郷里の高等小学校卒業！其の他学校歴に数えることが出来るとすれば、英語の夜学がある。たゞ此の二つあるばかりだ。さうだ彼れは他に日本大学にはいつたことがある。しかしながらそれは一年半程できつぱりとお免を蒙つた。なぜであるかと云ふに、少しも其の意義と価値とが認められなかつたからである。と云ふ訳は日本大学に於て教授をせらるゝ位のこと、彼れはそれ以前に於て既に独学にてこれを完了してをつたからである。大学！などと云ふといかにも名が立派だが、其の教授や講師は、ホンの小

使銭とりに来るに過ぎない。名もない職業のない文学士達が、自分もまだ本当にわかつてもゐないことを、大学時代のノート其のまゝ、朗読的に教授する。それも一般的・系統的にやつて呉れるならばまだよいが、全く出鱈目にやる者がある。」(渡部 1922a、316-317頁)

註4 1921年の著作『集説批判教育学概論』巻末の「著者より」において渡部は次のように述べる。「私には所謂学校歴と称するものがない。それが或るときには非常に淋く感ずることもある。が其の反対に、貧弱ながらも自己の力をしめじみと味うことの出来る場合もある。かうした境遇の人は、あながち私一人ではあるまい。中にも遠い田舎に、話相手もなく、教鞭を右手に、思想學術の書を左手に握りしめてをる、第二第三の私があることであらうと思ふ。私はそれを思ふと、此の不遇な若い教育者達に、得も言はれぬやせなさを感じずにはゐられない、ちやうど今から十年前の自分にひきくらべて。」(渡部 1921a、734頁)

註5 この経緯を渡部晶は次のように説明している。「渡部が小学校の教員をしている時に、教育評論家になる機会がめぐってきました。当時、「教育界」という雑誌がございまして、そこに投書したんです。」(渡部晶、81頁)——東京高等師範学校の教授だった森岡常蔵の講習会に参加した渡部政盛が「森岡常蔵先生の講義を疑う」という題目の投書をし、これが契機となって雑誌『教育界』の記者となったようである。

註6 渡部晶は次のように証言している。「当時の日本の教育界では、文部省の役人も渡部を非常に嫌ったようです。何か文部省で新しいことをやろうというときすぐ雑誌に書いた訳ですね。文部省の人は“渡政”(わたしょう)といいまして、渡政がまた何か書きましたねと言って、よく評判になったようであります。野人、野学者なんです。親父は先程申しましたように学閥に属していない、つまり大学に1年半いましたけれども、どこかの大学の卒業生ではないんですから恩師というものは、まあいい訳ですね。従って評論家になるには非常に都合がいい訳です。大学を出ますと自分が教わった先生、自分の大学だけはあまり悪口を言えないんです。ところが親父は大学を出ていないんです。思い切って何でも書けるんでね、東大であろうが、京都大学であろうがみんなやり玉にあげてとにかく批判をする、いい所は誉め、悪い所は弱点だと、こういう事をやった訳です。」(渡部晶、82頁)

註7 『帝国教育』編集者の三浦藤作は「渡部君の『ひとりごと』に就いて」と題して次のようにコメントしている。「渡部君の『ひとりごと』といふ原稿が着いたのは、締切少し前のことであつた。此の一篇は、寄稿者にとつて、正直な感想ならんもこれが掲載には大に躊躇した。それは、同業者の個人的批評に関する文字が非常に多いからである。(…略…)併し、予はこれを掲載することにした。迷惑を感じる人ならば、反駁証明のために次号の頁を割譲する。またかくの如き記事を掲載したことに就いての非難や攻撃あらば、当然編集者たる予がこれを受ける。」(渡部 1926a、90頁)

註8 大日本学術協会編『日本現代教育学大系・第2巻』によれば、渡部の性格は以下のようなものであったという。「氏は非常に自我の強い人である。即ち氏は曰ふ「僕は人を世話したことがあるが、ついで人の世話になつたことはない。将来もその積りである」と。随て氏は極めて辛抱強い。一念目的を達成せざれば止まない慨がある。また氏は厳肅にして正確而も自然な性質の所有者である。それ故氏は不自然、巧言伶色を憎み「弱き」を忌む。そして時には癩癪玉を破裂さして毒言毒筆することすらある。而も氏はこれを毒言毒筆とは信じない、「直言直筆だ」と考へてをる。」(大日本学術協会 1928、302頁)

註9 講壇教育学とは一線を画した渡部であるが、教育学との関係を一切絶つというようなことは考えておらず、むしろ自ら教育学へ歩み寄るような姿勢も見せている。たとえば1921年の著作『現今改造的教育思潮批判』巻末には次のようなメッセージが掲載されている。「教育学術問題・最近教育思潮等に関し、講演・講習の交渉、その他余の説に対する質疑等は、直接著者(東京市本郷駒込動坂町一二二)宛て発信せられんことを希望します。余は都合のつく限り喜んでこれに応じます。実費以外謝礼等は申受けません。一々書肆宛交渉せらるゝはお互に煩と存じ、こゝに一言附記した次第であります。」(渡部 1921c、388頁)

註10 渡部晶はこのように述べている。「学閥に属さないということ、これが彼の自慢する所の一つであった訳であります。それから官途につかない。小学校の先生はやりましたけれども、彼はもうどこにも勤めない、専ら書齋で本を書くことをやっております。」(渡部晶、83頁)

- 註11 日本の教育学を研究対象にしようとする渡部の問題意識は、1920年の著作『日本教育学説の研究』の「緒論」からもうかがえる。「我が国の教育学研究者は、これまで随分と欧米の教育思想を輸入し、又現にあれやこれやと物色して、輸入し紹介しつゝある。言ふまでもなく結構なことである。けれども一歩足を踏み止めて、其の自国の教育思想は如何にあるか、自国の教育学説には如何なるものがあるか、其の長所短所は如何等、換言せば自国の教育学説に対して、真面目に批判的研究を試みた者は、これまで一人もあつたのを聴かない。全体これはどうしたことか。余は衷心其の理由を解するに苦しむものである。何となれば余の考に由れば、我が国も維新以来六十年、今や文化の独立期に入り、教育学界に在ても、批判論究の対象とするに足る教育学書が、其の数固より多くはないが、兎に角数種あるからである。」(渡部 1920、1頁)
- 註12 渡部は1921年の著作『集説批判教育学概論』の「序」において「真の批評は自家独自の理想を有し学説を持つる者にして始めて可能なことである」と前置きしたうえで、「余はどうしても自家の教育学説を発表せねばならぬ立場に逢着した」と自らの決意を述べる(渡部 1921a、序1頁)。しかし、「自家の教育学説」が具体的にどのようなものなのかは、同書においても十分に示されてはいない。
- 註13 「『最近教育学説の叙述及批判』、『現今改造的教育思潮批判』は、当時天下の教育者に愛読せられたる書である。両書ともにその刊行部数は一万を超えてをる。」(大日本学術協会 1928、302-303頁)——大日本学術協会編『日本現代教育学大系・第2巻』の記述が正しいとすれば、渡部の1918年著作『最近教育学説の叙述及批判』は発行部数1万を超えるヒット作であったと言えよう。
- 註14 小西は、1901年の卒業論文「倫理上の自我観念」および1906年論文「エレン、ケイの「児童の世紀」に就て」(小西 1906c)の中で数回「超人間」に触れたほか、同年発表の「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要」において1度だけ「力の意志」に言及してはいるが、それ以降は全く取り上げず、1917年のニーチェ論においても「超人」と「力への意志」は一切登場しない。小西にとってニーチェの教育観は、多くの教育学者が注目した後期思想にではなく、初期思想の講演論文「われわれの教養施設の将来について」にこそ求められるべきものだったのである。小西直直のニーチェ受容に関しては、松原 2022を参照されたい。
- 註15 1907年に『その世界観と人生観との関連から見た若きニーチェの教育学的思想』を出版したエルンスト・ウェーバーについても詳述されるが、芸術的教育学の代表的存在として取りあげられており、ニーチェ受容者としての側面については一切触れられない。
- 註16 このあと、【補】として「ニイチエの道德観」について以下のような注釈がある。「人類は其の団員中に最大の差別ある程有益なるはなし。総ての地位及び關係に於て、此の差異を顧慮せざる可らず。随て道德も亦人の二典型に依りて異なる。即ち一は優強者の道德にして、他は奴隸の道德なり。善悪は人の行為に固有のものには非ず。人は生れながらにして道德的又は不道德的性質のものにはなし。唯だ此の性の基礎たる本能に基きて活動するものなり。而して吾人は此に権力を求めんとする意志の存在を認む。人には各権力を得んとする意志あり。然れども其の用ひ得る力を違ふるを以て、同一行動に対する価値判断を異にし。二種の道德を生ずるものなり。而して強者の道德は、優者の道德にして発揚して強大なる生活を現じ、弱者の道德は奴隸道德にして降下的生活を現出す。又、吾人は、平等を不当とするの理由を以て、自由主義をも排す。蓋し自由制度は弱少、怯懦、懈惰等の源となり。只管群集のみを榮えしむるに過ぎざればなり。真に自由なる人とは戦闘者の義なり、自由は、打勝てる抵抗と、上位を維持する為に用ひし勞力とに由りて、計量すべきものなり。最高の自由なる人は、唯だ最強の抵抗に打克ちし所にものみ発見することを得可し。」(渡部 1918b、391-392頁)
- 註17 本書におけるニーチェへの言及は他に、高山林次郎／樗牛の「ニーチェ主義」(渡部 1918b、756頁；768頁)、「ニーチェの超人主義教育の如き、個人的教育思想」(前掲書、794頁)の類才教育思想に対する影響が語られている箇所において確認される。
- 註18 1933年に刊行された渡部政盛編著『吉田熊次氏教育学』には、日本教育学会文検教育学研究叢書「刊行の辞」が掲載されている。「文検は独学青年教育者の登竜門である。また好学者の力試しの機関である。かゝる意味からして青年教育者に向つて文検応試を極力勧めるものである。二十歳頃から三十歳頃にか

けて、勉強しておいた効果は、その後になつて必ず現れて来るものである。本は若いうちに読んでおくがよい。(…略…) 受験者は、試験委員の人物思想、学説、学風と云ふものを十分に知つてからねばならぬ。さうでないといふとんだ所で不覚をとることがある。このことは内容的にも試験技術的にも大事なことからである。委員諸氏は、皆立派な人達であるから、自分の学説と一致しないからとて、直ちにこれを落第せしむるが如きことは致す筈がないが、心得てをる方が何れからするも安全であり、鬼に金棒である。」(渡部編著 1933、序1-2頁)

- 註19 これは、巻末附録として掲載された教育科試験問題集「第二九回予備」の第4問を再掲したものである。
- 註20 本書には「ツアラトウストラ」という項目も掲載されているが、具体的な意味内容はゾロアスター教のことを指しており、ニーチェの著作『ツアラトウストラ』とは無関係のようである。「ザラツシユトラ又はゾロアスターと呼ばれる。波斯教の革新者でツアラトウストラ教の教祖である。イランに生る。其の在生の年代は不詳であるが、ジキアクソンといふ人の研究によれば、西紀前六六〇年から五八三年の間に出た人であるといふことである。其の教を布いたのは、重に東イラン殊にバクトリアの地で、又三十歳の時に自己の教を説き始め、七十歳の時に戦死したといふのは事実に近い。ツアラトウストラ教は、久しく波斯の国教であつたが、アレキサンドリヤ大帝の遠征後一時廃せられて、又旧に復し、モハメット教の勃興するまで、其の国教であつた。現在でも約九万の信徒があるとの事である。」(渡部 1924d、303頁)
- 註21 高橋勇との共著『系統的教科解説』においては「主意主義」(渡部・高橋 1925、44頁；266頁)、同年出版の単著『ディルト派の哲学とその教育学説』においては「生の哲学」的な文脈においてニーチェ思想が登場する(渡部 1925d、55頁)。
- 註22 1918年に出版された共著作『文検受験用教育勅語及戊申詔書解義』、1919年の単著『最新批判的心理学』をはじめ、帝国教育会編の雑誌『帝国教育』第471号に収録された論文「現今教育学説と先験哲学」(1921d)、単著『新カント派の哲学とその教育学説』(1922b)、『帝国教育』第488号掲載の論文「批判的教育学の性質及び価値」(1923a)、国際教育協会編『国際教育の理論及実際』に収められた「教育理想と国際教育」(1923e)、単著『プラグマチズムとその教育学説—現代哲学と新教育学説—』(1924a)、単著『ナトルブカデュウエイカ』(1924d)、『帝国教育』第514号に掲載された「日本現代の芸術教育とその批判」(1925b)、『帝国教育』第522号に寄稿された「ひとりごと」(1926a)、同誌第531号の「自学自習をなさしむる最も適当なる方法」(1926b)、単著『新しき教育及教育学の建設』(1926c)、『帝国教育』第537号に掲載された「本年度中学校入学試験批判」(1927a)、同誌第539号の「中学校に於ける低学年教育」(1927b)、単著『現象学と教育』(1927d)、森岡亀芳との共著『最新教育学集成』(1927)、『帝国教育』第547号の「中学校一二年の漢文教育に就て」(1928a)、単著『教育哲学思潮概論』(1928b)、『帝国教育』第554号に掲載された「この頃の感想」(1928c)、単著『現代世界の新学校と新教育』(1929a)、『帝国教育』第564号収録の「文理科大学の学風に就て余の希望を述ぶ—(所謂高等師範氣質を一洗せよ)—」(1929b)、同誌第569号の「官吏不忠論」(1930a)、同誌第572号の「社会民衆党は何処へ行く」(1930b)、単著『マルキシズムの教育と其批判』(1931a)、『帝国教育』第583号に収められた「郷土教育批判」(1931b)、単著『最新学校学級経営原論』(1932c)においては、ニーチェへの言及がない。

1933年著作『教育科講座』以降は、ニーチェへの言及回数が極端に減る。『現代日本の教育をどう考へる』(1933c)をはじめ、森岡亀芳との共著『最新教育学精義』(1933)、渡部が編著者となって日本教育学会から刊行された文検教育学研究叢書『吉田熊次氏教育学』(1933)、『下田次郎氏教育学』(1934a)、『乙竹岩造氏教育学』(1934c)、単著『尋一新修身書の解説とその批判』(1934a)、『教育的児童観の研究』(1934b)、『帝国教育』第663号に掲載された「昭和十年に於て実現させねばならぬ教育問題」(1934c)、『帝国教育』第665号の「昭和十年の教育思想学術問題」(1935a)、単著『生活学校の機構と経営』(1935c)、『帝国教育』第670号に収められた「劳作学校より生活学校へ」(1935d)、単著『青年学校の理想と経営』(1935e)、『帝国教育』第674号掲載の「青年学校制度批判」(1935f)、『帝国教育』第678号の「反動教育の禍害をどう考へる」(1935g)、『最新史観国史教育』第2号に掲載された「歴史と其の疑惑性」(1935h)、単著『農村青年

学校の教育』(1935i)、『解釈学表現学及意義学』(1935j)、『帝国教育』第687号収録の「意義学の問題」(1936a)、同誌第688号の「表現学とは何ぞや」(1936b)、同誌第689号の「解釈学とは何ぞや」(1936c)、同誌第691号掲載の「個人、社会人、国民、公民」(1936d)、『尋四教材王国』第8巻第3号に収められた「政治教育と公民教育」(1936e)、『帝国教育』第693号に掲載された「選挙取締と国民道徳の破壊」(1936f)、同誌第695号の「小学校令第一条の改正を断行せよ」(1936g)、同誌第698号の「昭和十一年教育小史」(1936h)、同誌第699号掲載の「学校教育に対する要望」(1937a)、単著『青年教師時代』(1937b)、『帝国教育』第704号に掲載された「日本教育学の問題」(1937e)、単著『日本的なるもの、研究』(1937f)、『帝国教育』第705号掲載の「教学刷新と現代教育学」(1937g)、単著『生活学校の理想と経営』(1937h)、『帝国教育』第709号収録の「国民精神総動員と日本主義」(1937i)、同誌第714号の「教育に於ける順応と創造の問題」(1938b)、同誌第716号の「ナチス全体主義と日本全体主義」(1938c)、同誌第717号の「科学教育と人格陶冶」(1938d)、『最新史観国史教育』第38号に掲載された「歴史と歴史的法則と史観」(1938e)、『帝国教育』第724号に収められた「東亜共同体とは何ぞや」(1939a)、同誌第725号の「東亜共同体と教育の革新」(1939b)、同誌第727号の「形態心理学と文化の問題」(1939c)、同誌第729号掲載の「国際間に於ける生存競争と価値の原理」(1939d)、同誌第731号の「現代に於ける世紀の転換」(1939e)、同誌第734号の「教育の戦時体制的反省」(1939f)、同誌第736号の「新教育学の胎生と其動向」(1940a)、同誌第737号の「国民学校教科案の再検討」(1940b)、同誌第739号の「このごろの感想」(1940c)、同誌第740号の「国民学校の陶冶理想」(1940d)、同誌第743号の「国内新体制と教育の問題」(1940e)、同誌第743号の「高度国防国家論」(1940f)、同誌第747号の「東亜理科の建設と其の教育」(1941a)、同誌第748号の「科学教育の問題」(1941b)、同誌第751号の「体育と日本的性格の問題」(1941c)、同誌第755号の「児童文化の問題」(1941d)、同誌第760号の「教育方法としての「行」の検討」(1942a)、さらに同誌第767号掲載の「日本教育学と理論的教育学の問題」において、ニーチェは一切登場しない。

註23 渡部政盛と千葉命吉はしばしば論戦を繰り広げていたようである。息子の渡部晶は次のように証言している。「この千葉命吉という人は、「独創」という雑誌を出したんですね、小さな雑誌で、私も学生の時に何回か見たことがあります、これを編集していた訳です。独創する為には、独創的な人間になる為には一切衝動皆満足論の教育を受けなければいけないというんです。渡部は千葉命吉と論戦をいたしまして、非常に感情的になっていますね、この「独創」をです、独創じゃない、あんなもの「毒草」だ、教育界の毒草だと言って悪口を言っておりました。」(渡部晶、83頁)

しかし、少なくとも渡部政盛本人は千葉との関係性を楽しんでいたようである。「けふの郵便物の中に、珍しや千葉命吉からの賀状がまじつてゐた。千葉が最近帰つて来られたと云ふことは、過日為藤からの手紙の末にも書かれてあつたし、その後週報誌上においても承知してゐた。しかし御本人から賀状兼帰国のあいさつ状をもらはうとはちつとも思つてゐなかつた。それだけ私は心から嬉しく感じた。嬉しく感じた理由の最大なる一つは、千葉が外遊前、衝動満足の教育論時代には私とはかなりやりあつたことがあつたが、それにもかゝらず旧交(旧闘か)を温むべく、忘れずに賀状を寄されたからである。千葉は面白い男である。もともと私は彼れを人間的に愛し且つ尊敬してゐた。言ふことには曾て不服も唱へ反対もしたが、人間的には親しめる男である。生一本なところがいい。私の強いところが面白い。また小利口に立ち廻らず官権なり社会なりに面と向つて闘つていくところが我意を得てをる。あの場合大ていの者ならば、督学官にピョコリとお辞儀をして、君子何とやらするところであつたにちがひないが、千葉はさうはしなかつた。」(渡部 1926a、96頁) / 「千葉のハガキに依ると伯林大学でシユプランガーの哲学を聴いて来たとか云ふことである。それは誠に結構なことである。併しシユプランガーは結局に於いて理想主義の範囲を出てないのだから、千葉の衝動満足論とは似ても似つかぬ筈である。そこで千葉は、真に千葉に生きるためにはこのシユプランガーをどうにか超越しなければならない。果してそこまで突きとめて来たかどうか。但しこの前のやうな野狐禅では私は承認しない。(…略…) とにかくこれからさきの千葉の歩き振りが見物だ。好漢野人千葉、しつかりやれ。はやくその独創学とやらを発表しろ。

時に依てはまた一戦を試みるから。」(前掲書、96-97頁)

- 註24 ある受験予備雑誌に掲載された一文の中で渡部は「超人主義」を「真理思慕主義」と解釈している。「詩人的哲学者ニイチエは「超人主義」と云ふものを唱道してあつた。ニイチエの超人主義は、政治上の征服主義や生物学上の弱肉強食主義ではない。実に文化上の天才主義であり、凡俗を超越せざるべからざることを高調する哲学上の真理思慕主義であつた。だから彼は高らかに叫んだ。「真理に向つて真に勇敢に」と。」(渡部 1937c、6-7頁)
- 註25 同書の「序」において渡部は教育学再建の必要性を次のように訴える。「皇紀二千六百年も目睫の間に迫つて来た。この光輝ある記念日を迎へるためには、吾々は文化の改造を一日も早く断行し、その一面としての教育学の再建設も出来るだけ急がずばなるまい。そして名実共に文化国日本の偉容を、皇祖皇宗並びに吾等国民の祖先に報告しなければならないと思ふ。一言記して序となす所以である。」(渡部 1937d、序3頁)
- 註26 例外的に特色ある教育研究を行っている大学として広島文理科大学が挙げられている。「この点にかけては、広島文理科大学の教育学の方が頗る鮮明である。特色があざやかに浮び出てをる。と云ふのは、広島文理大の教育学は、精神科学的心理学的教育学、乃至は生命主義の教育学色を以て殆ど全部が塗られてをるからである。」(渡部 1937d、16頁)
- 註27 渡部はこうも言う。「からだが矮小であるばかりでなく、どうも日本人は型までが小さい。型が小さいと云ふことはやがて直ちに人間としてその偉大性が貧弱であることを物語る。国名のみは大日本であるが、国民はあまりどうも偉且つ大ではないやうである。世界的偉大さをもつたやうな人は数へる程しか見当らない。こんなことではいかんのである。もつともつと偉大性を培養して偉にして且つ大なる人間をどし々々出さねばならない。」(渡部 1929c、136頁)
- 註28 ニイチエはしばしば「見出し語提供者」として、あるいは彼自身「見出し語」として利用されている。「例へばニイチエの思想はこれを思想とは云ふが、思潮とは云はず、又近世思想界の全体を、思想とは云ふが、無闇に思潮とは云はぬが如き類である。」(渡部 1918a、2頁) / 「次に先人の分類せし主なるものを見るに、例へばニイチエは之を大きく二つに分けてアポロ型とディオニソス型とし、前者は美しい夢の世界、想像の世界に居る者、後者は本能によりて支配され、破壊を喜ぶ様な者となし、人の性格を以て神の性格に擬してある。(アポロは野蛮に打勝つ神、ディオニソスは半神半獣の神である。)」(渡部 1933a、114頁)
- 註29 中島半次郎の1914年著作『人格的教育の思潮』は、1918年の「ニイチエの教育説」における渡部の「超人」解釈を先取りしている。下線部における両者の表現はとくに酷似しており、時系列的に見て、渡部が中島の文章を参照した可能性は高いと思われる。「然らばニーチェが教育の目的として作らんとする超人とは如何なるものであるか、彼は精神に於ても身体に於ても強く、思想豊富にして新境地を開く勇氣を有し、常人が動物の上に位せる如く、常人の上に位し、無限に精進する力を有し、善悪といふが如き相対的道德に囚はるゝこと無く、自ら価値の定め手となるが如き自由なる又偉大なる人格を意味して居る。」(中島、60頁) / 「真の教化を目的として超人を作るには、其自由を抑へず基本性に訴へ、自己修養を為さしめねばならぬ。内心を革新し、至純な道徳的性能を発達せしむることを計らねばならぬ。」(前掲書、61頁) なお中島半次郎のニーチェ受容については、松原 2020aを参照されたい。
- 註30 篠原助市の1947年著作『独逸教育思想史』下巻の第7章「過渡期の教育」第1節「個人主義的反動」に収められた第1項が篠原のニーチェ論になっており、そのタイトルも「ニーチェと「超人」の教育」であるが、「超人」推しの先駆性と一貫性は渡部に譲らなければならない。なお篠原助市のニーチェ受容に関しては、松原 2020cおよび松原 2021aに詳しい。
- 註31 渡部と同じ山形県出身の田制佐重も、教育社会学者というある種の異端者の視点を持ちながらニーチェ受容を試みた人物と言えるかもしれない。なお田制佐重のニーチェ受容については、松原 2021bに詳しい。

## 【参考文献】

### ○渡部政盛の著作論文【単著】

- 渡部政盛 1918a 『最近教育学説の叙述及批判』大同館。
- 渡部政盛 1918b 『文検西洋東洋日本教育史』大同館。
- 渡部政盛 1919 『最新批判の心理学』大同館。
- 渡部政盛 1920 『日本教育学説の研究』大同館。
- 渡部政盛 1921a 『集説批判教育学概論』大同館。
- 渡部政盛 1921b 「自由教育思潮批判」『帝国教育』第468号、32-41頁。
- 渡部政盛 1921c 『現今改造的教育思潮批判』大同館。
- 渡部政盛 1921d 「現今教育学説と先験哲学」『帝国教育』第471号、43-52頁。
- 渡部政盛 1922a 『異端者の悲しみと歎び』大同館。
- 渡部政盛 1922b 『新カント派の哲学とその教育学説』啓文社。
- 渡部政盛 1923a 「批判的教育学の性質及び価値」『帝国教育』第488号、58-61頁；65-67頁。
- 渡部政盛 1923b 『教育学術問題批判』大同館。
- 渡部政盛 1923c 『文部検定教科受験提要〔七版〕』啓文社。
- 渡部政盛 1923d 「自由教育の歴史的理論的實際的批判」明治教育社編『自由教育厳正批判』啓文社、45-124頁。
- 渡部政盛 1923e 「教育理想と国際教育」国際教育協会編『国際教育の理論及實際』文化書房、149-157頁。
- 渡部政盛 1924a 『プラグマチズムとその教育学説—現代哲学と新教育学説—』啓文社。
- 渡部政盛 1924b 「美的教育学説の論拠とその批判」帝国教育会編『芸術教育の最新研究』文化書房出版、181-216頁。
- 渡部政盛 1924c 『教育学説の論理及び其批判』太陽堂。
- 渡部政盛 1924d 『ナトルブかデュウエイか』都村有為堂。
- 渡部政盛 1924e 『最新哲学辞典』大同館。
- 渡部政盛 1924f 『認識と教育—教育的認識論—』都村有為堂。
- 渡部政盛 1925a 『学習の原理及其實際』太陽堂。
- 渡部政盛 1925b 「日本現代の芸術教育とその批判」『帝国教育』第514号、19-41頁。
- 渡部政盛 1925c 『集説批判教育学概論』（改訂五版）大同館。
- 渡部政盛 1925d 『ディルタイ派の哲学とその教育学説』啓文社。
- 渡部政盛 1926a 「ひとりごと」『帝国教育』第522号、91-98頁。
- 渡部政盛 1926b 「自学自習をなさしむる最も適當なる方法」『帝国教育』第531号、61-62頁。
- 渡部政盛 1926c 『新しき教育及教育学の建設』啓文社。
- 渡部政盛 1927a 「本年度中学校入学試験批判」『帝国教育』第537号、56-62頁。
- 渡部政盛 1927b 「中学校に於ける低学年教育」『帝国教育』第539号、71-79頁。
- 渡部政盛 1927c 『現代日本の教育学説及其批判』大同館書店。
- 渡部政盛 1927d 『現象学と教育』啓文社。
- 渡部政盛 1928a 「中学校一二年の漢文教育に就て」『帝国教育』第547号、25-32頁。
- 渡部政盛 1928b 『教育哲学思潮概論』郁文書院。
- 渡部政盛 1928c 「この頃の感想」『帝国教育』第554号、109-117頁。
- 渡部政盛 1929a 『現代世界の新学校と新教育』郁文書院。
- 渡部政盛 1929b 「文理科大学の学風に就て余の希望を述ぶ—（所謂高等師範氣質を一洗せよ）—」『帝国教育』第564号、21-27頁。
- 渡部政盛 1929c 『若き教育者に与ふる書』啓文社。
- 渡部政盛 1929d 『提要文検教育科の組織的研究』啓文社。
- 渡部政盛 1930a 「官吏不忠論」『帝国教育』第569号、12-18頁。



- 渡部政盛 1930b 「社会民衆党は何処へ行く」『帝国教育』第572号、41-47頁。
- 渡部政盛 1931a 『マルキシズムの教育と其批判』啓文社。
- 渡部政盛 1931b 「郷土教育批判」『帝国教育』第583号、62-69頁。
- 渡部政盛 1932a 『最新西洋教育史講義』大同館。
- 渡部政盛 1932b 『学習指導原論』文化書房。
- 渡部政盛 1932c 『最新学校学級経営原論』文化書房。
- 渡部政盛 1933a 『教育科講座』文化書房。
- 渡部政盛 1933b 『現代教育学の形態と其動向』南光社。
- 渡部政盛 1933c 『現代日本の教育をどう考へる』啓文社。
- 渡部政盛 1934a 『尋一新修身書の解説とその批判』啓文社。
- 渡部政盛 1934b 『教育的児童観の研究』啓文社。
- 渡部政盛 1934c 「昭和十年に於て実現させねばならぬ教育問題」『帝国教育』第663号、25-30頁。
- 渡部政盛 1935a 「昭和十年の教育思想学術問題」『帝国教育』第665号、42-48頁。
- 渡部政盛 1935b 『提要文検教育科の組織的研究』啓文社。
- 渡部政盛 1935c 『生活学校の機構と経営』友生書院。
- 渡部政盛 1935d 「労作学校より生活学校へ」『帝国教育』第670号、13-19頁。
- 渡部政盛 1935e 『青年学校の理想と経営』北海出版社。
- 渡部政盛 1935f 「青年学校制度批判」『帝国教育』第674号、39-45頁。
- 渡部政盛 1935g 「反動教育の禍害をどう考へる」『帝国教育』第678号、26-35頁。
- 渡部政盛 1935h 「歴史と其の疑惑性」『最新史観国史教育』第2号、34-38頁。
- 渡部政盛 1935i 『農村青年学校の教育』北海出版社。
- 渡部政盛 1935j 『解釈学表現学及意義学』啓文社。
- 渡部政盛 1936a 「意義学の問題」『帝国教育』第687号、36-45頁。
- 渡部政盛 1936b 「表現学とは何ぞや」『帝国教育』第688号、54-62頁。
- 渡部政盛 1936c 「解釈学とは何ぞや」『帝国教育』第689号、69-80頁。
- 渡部政盛 1936d 「個人、社会人、国民、公民」『帝国教育』第691号、6-15頁。
- 渡部政盛 1936e 「政治教育と公民教育」『尋四教材王国』第8巻第3号、1-9頁。
- 渡部政盛 1936f 「選挙取締と国民道德の破壊」『帝国教育』第693号、37-41頁。
- 渡部政盛 1936g 「小学校令第一条の改正を断行せよ」『帝国教育』第695号、49-55頁。
- 渡部政盛 1936h 「昭和十一年教育小史」『帝国教育』第698号、61-71頁。
- 渡部政盛 1937a 「学校教育に対する要望」『帝国教育』第699号、35-39頁。
- 渡部政盛 1937b 『青年教師時代』東洋図書。
- 渡部政盛 1937c 「真理を思慕するもの」『考へ方』第20巻第2号、4-11頁。
- 渡部政盛 1937d 『日本現代の教育学』啓文社
- 渡部政盛 1937e 「日本教育学の問題」『帝国教育』第704号、26-31頁。
- 渡部政盛 1937f 『日本的なるもの、研究』啓文社。
- 渡部政盛 1937g 「教学刷新と現代教育学」『帝国教育』第705号、17-21頁。
- 渡部政盛 1937h 『生活学校の理想と経営』啓文社。
- 渡部政盛 1937i 「国民精神総動員と日本主義」『帝国教育』第709号、54-65頁。
- 渡部政盛 1938a 『日本教育学原義』啓文社。
- 渡部政盛 1938b 「教育に於ける順応と創造の問題」『帝国教育』第714号、36-43頁。
- 渡部政盛 1938c 「ナチス全体主義と日本全体主義」『帝国教育』第716号、38-47頁。
- 渡部政盛 1938d 「科学教育と人格陶冶」『帝国教育』第717号、26-32頁。

- 渡部政盛 1938e 「歴史と歴史的法則と史観」『最新史観国史教育』第38号、30-35頁。  
渡部政盛 1939a 「東亜共同体とは何ぞや」『帝国教育』第724号、92-97頁。  
渡部政盛 1939b 「東亜共同体と教育の革新」『帝国教育』第725号、61-68頁。  
渡部政盛 1939c 「形態心理学と文化の問題」『帝国教育』第727号、72-79頁。  
渡部政盛 1939d 「国際間に於ける生存競争と価値の原理」『帝国教育』第729号、42-49頁。  
渡部政盛 1939e 「現代に於ける世紀の転換」『帝国教育』第731号、76-83頁。  
渡部政盛 1939f 「教育の戦時体制的反省」『帝国教育』第734号、26-32頁。  
渡部政盛 1940a 「新教育学の胎生と其動向」『帝国教育』第736号、19-27頁。  
渡部政盛 1940b 「国民学校教科案の再検討」『帝国教育』第737号、12-19頁。  
渡部政盛 1940c 「このごろの感想」『帝国教育』第739号、45-49頁。  
渡部政盛 1940d 「国民学校の陶冶理想」『帝国教育』第740号、55-62頁。  
渡部政盛 1940e 「国内新体制と教育の問題」『帝国教育』第743号、6-15頁。  
渡部政盛 1940f 「高度国防国家論」『帝国教育』第745号、28-36頁。  
渡部政盛 1941a 「東亜理科の建設と其の教育」『帝国教育』第747号、46-51頁。  
渡部政盛 1941b 「科学教育の問題」『帝国教育』第748号、21-29頁。  
渡部政盛 1941c 「体育と日本的性格の問題」『帝国教育』第751号、18-25頁。  
渡部政盛 1941d 「児童文化の問題」『帝国教育』第755号、60-67頁。  
渡部政盛 1942a 「教育方法としての「行」の検討」『帝国教育』第760号、21-28頁。  
渡部政盛 1942b 「日本教育学と理論的教育学の問題」『帝国教育』第767号、46-51頁。

#### ○渡部政盛の著作論文【共著】

- 渡部政盛ほか 1918 『文検受験用教育勅語及戊申詔書解義』大同館。  
渡部政盛・吉原藤助 1922 『最新教育大意講義』啓文社。  
渡部政盛・吉原藤助 1925 『最新教育大意講義』啓文社。  
渡部政盛・高橋勇 1925 『系統的教育科解説』啓文社。  
渡部政盛・森岡亀芳 1927 『最新教育学集成』啓文社。  
渡部政盛・守屋貫秀 1930 『最新教育辞典』大同館。  
渡部政盛・森岡亀芳 1933 『最新教育学精義』啓文社。  
渡部政盛編著 1933 『吉田熊次氏教育学』（文検教育学研究叢書）日本教育学会。  
渡部政盛編著 1934a 『下田次郎氏教育学』（文検教育学研究叢書）日本教育学会。  
渡部政盛編著 1934b 『小林澄兄氏教育学』（文検教育学研究叢書）日本教育学会。  
渡部政盛編著 1934c 『乙竹岩造氏教育学』（文検教育学研究叢書）日本教育学会。  
渡部政盛編著 1934d 『森岡常蔵氏教育学』（文検教育学研究叢書）日本教育学会。  
渡部政盛・村中兼松 1935 『精神貧困児の教育』啓文社。

#### ○その他の参考文献

- Prondczynsky, A.v.1998: Historische Konstruktionen. Zur Rezeption Nietzsches in „Geschichten der Pädagogik“.  
In: Nietzsche in der Pädagogik ?, S.56-79.  
小西重直 1917 「ニイツェの学制論」京都哲学会編『哲学研究』第16号、56-74頁。  
篠原助市 1922 『教育辞典』宝文館。  
篠原助市 1930 『教育の本質と教育学』教育研究会。  
篠原助市 1947 『独逸教育思想史』（上・下巻）創元社。  
鈴木明哲 2013 「戦時下における腹と腰—渡部政盛の体育論から—」大熊廣明監修・真田久ほか編『体育・スポー

- ツ史にみる戦前と戦後』道と書院、23-35頁。
- 大日本学術協会編 1927『日本現代教育学大系・第4巻』モナス。
- 大日本学術協会編 1928『日本現代教育学大系・第2巻』モナス。
- 中島半次郎 1914『人格的教育学の思潮』同文館。
- 松原岳行 2020a「中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第75号、113-136頁。
- 松原岳行 2020b「長田新の教育学におけるニーチェ受容とその特質—生の哲学者としてのニーチェ像の意味—」『九州教育学会研究紀要』第47巻、49-56頁。
- 松原岳行2020c「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質（1）—1920年代の著作『批判的教育学の問題』、『教育辞典』、『理論的教育学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第76号、45-69頁。
- 松原岳行 2021a「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質（2）—1930年以降の著作『教育の本質と教育学』、『増訂・教育辞典』、『独逸教育思想史』、『教育哲学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第77号、63-92頁。
- 松原岳行 2021b「田制佐重の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第78号、27-55頁。
- 松原岳行 2022「小西重直の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第79号、1-37頁。
- 渡部晶 1987「大正新教育と渡部政盛の教育思想」（渡部晶先生講演録）日本大学教育学会編『教育学雑誌』第21号、79-89頁。

## 【付記】

本研究はJSPS科研費JP21K02275の助成を受けたものです。

